
羊の世界にとりっぷ！

さくらさくらさくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羊の世界にとつづふ！

【Zコード】

Z72780

【作者名】

セイヒセイヒセイヒ

【あらすじ】

企画名【Smile Japan】少しでも皆様の笑顔のたしになれば幸いです。

夕花さま「猫の世界にとつづふー！」

市太郎様「狼の世界にとつづふー！」

堅川杼緯様「豹の世界にとつづふー！」

以上のすばらしいお話を読み、萌えてしまつたさくらが送ります。
リスクして、インスペクタ・インスペクタ・インスペクタした品がこれなんですが。
・・。世界観を壊してないことを祈ります。

羊の国からいじめちま。(前書き)

狼族、猫族、豹族ときたので、癒し系。

半の国からいじたひな。

拝啓 お父様、お母様へ

おもえば、遠くにきてしました。

ご両親様とは、もう遠く、住む世界すらたがえてしました。
口つるさくはあつたけれど、愛してくれていたこと、心から感謝します。

ひとり、遠くはなれた身知らぬ場所で、心細くもありましたが、今は仕事もいただいて幸せに暮しています。

どうか、嘆かないでください。

いなくなってしまった貴方の娘は、今、この上なく幸せに暮しているのですから。

・・・遠く異世界の空の下で！

ただ、心残りがひとつだけ。

お父様、お母様。私の部屋の押入れの中のダンボールの中身だけは、どうかどうか、目を通さず。

のぞいたら最後、あなたの知らない世界へご案内されちゃいます。
その筋の友人が、弔問の際に引き取つて行ってくれる手はずになつておりますから、どうか手を触れないでくださいね。
腐女子の絆は舐めたもんじやないのです。

貴方の娘より。

それはある晴れた日。

空に浮かぶ雲を見ながらのんびり歩いていた時のこと。
あ、あの雲おいしそう、などと考えていたからイケナカツタノデス。

はつと思つたときは足元に大地が無かつたのです・・・。
往年のマリリンが示した例のポーズを披露しつつ、落ちること約十数分。長かつた。

走馬灯のように脳裏に浮かぶあれやこれ。

ばすつけつとぼーるを持った赤い髪の人が黒い髪の人とハイタッチをしたあたりで、なんか可笑しいな、と思い当たり、冷静になつた私です。

しかもそのときは衝撃とともに訪れると思つていたのに・・・なんでしょう、ぽふん？ ぽわん？

綿菓子のような感触に、驚いて目を見開いてしまいました。

・・・これは、あれでしようか。
夢ですかね。

ひとつねつて見ましょ。まい、むわわわわ。

・・・いたい

どうやら夢ではなれやうです・・・。

・・・この世界は異なる種族の暮らす世界であるのですね。
のどかな田園風景の中、真白い毛玉の群れが。もしもし、もふも
ふ。ふかふかと。

・・・あ、え、ちよつ・・・

ああ、もふもふ。超気持ち良い・・・！ いや待てわたし。
なにこの、天然羊毛。ふわふわで、もしもじで至福とまじの」と
ですね！ だから待て、私。

あああん、このもふもふの海・・・！ なんかほかにコメントあるべきだろう、わたし！

・・・でも、羊さん、その洋服意味無いんじゃね？
奇妙なことに服を着た、羊の群れがそこに存在した。

・・・稀に、人間族の落人おとねうじんが、落ちてくることを熟知している彼らは、落ちてくる異邦人を助けようと集まつて来たのだが・・・そんなことこの娘には分からぬ。

彼らは、娘を歓迎するようにメエと鳴いた。

地面に降りて始めて、あー、私死にっぱぐれたんだと思った。
だつて私を支えてくれてた大きい羊さんの頭には立派な立派な、
角が。

それはもはや凶器。刺さつてたら死んでいたに違いない。
つづづく妙な運の良さに感心しつつ、顔を上げて背中で受け止めてくれた百パーセントホールな彼に頭を下げた。

・・・彼の瞳は温和な青色。

これが、私の御主人様との出会い。

* * * * *

「めえちゃん、めえちゃん、お腹空いたなの」
白くもふもふな毛玉もこもこな物体が、ころころと転が・・・ん

ん、歩いてきてそう言つた。

ああん、そうなの？ ジヤ、こっちの牧草はどうかしら？ 鉄分
豊富な緑黄色野菜ですよー！

口直しに刺激の強い草も取り揃えておきましたよ？ 甘くとうけ
る食感の草だつて用意しましたとも！

背中を駆け上る、この快感。この感覚は癖になりますね。

「めえちゃん、ここの中にも氣品を感じさせる獣人の子供が、手を前にも

じもじするけど、その手が・・・前に回そうとしてもどどかな・・・うぐつ。いかん、鼻血が・・・。

もじもじのあまり、手で毛をもてあそぼうと一

あ、あ、引つ張つちゃダメ！ 私がやさしく梳いて上げるから！ みてみてこの為にお隣のバリデス様の抜け替わりの毛をもらつてきたの！ ナミちゃんに頼んだらにっこり笑顔てくれたのよ！

狼の毛で作ったブラシなんて素敵でしよう？ ・・・あら、やだ。大丈夫、次はホワイトタイガーも狙つてるし、豹の毛だつて狙つてるわ。各種王者の毛で作られたブラシなんて、素敵でしよう？ あららあ？ いつそうお尻が引いてるわよお。

「ふふ・・・ふふふ。ふふ。ふふふふ

かわいいわ。そのへつぴり腰な感じ。

好いのよ好いのよ。狼は天敵だものね？ その毛だといえども恐怖の対象なのね？

うふ。うふふふふ。じゅる。

あ、いけない。ついつい、よだれが。

右手で口元をぬぐいつつ、片手に掲げた狼ブラシをちらつかせながら、そつと、そつとおびえて縮こまる子羊たちに近寄った。

「芽衣。・・・それぐらいにしてはくれまいか・・・」

心底、・・・心底、疲れたように待つたがかかった。・・・ち。

目が半眼になっているのが分かる。でも無理。あのラブリーでキューートな中に畏怖の影が浮かぶお姿ならまだしも！

座りきつたまなざしをすつと流せば、そこに佇むは、壯麗な主。

何で、人間の格好なおおお・・・。

「毛づくろいと、羊毛の管理が私の仕事であると理解しておりますが、ご主人様」

羊族のすべてを統べる主とまでわたしの「ご主人様、ノルティさまが立っていました。

衣食住、すべてにおいてノルティ様がいなければ、保護される落人といえど、生活に苦労するはずです。

・・・豹のご主人様、カーキ様のところでリナちゃんは女主人として君臨しているけどね。

文字通り女王様だ。鞭が似合う。似合いすぎる・・・。
うなる鞭に影で女王様と崇拜されているらしいの。

その上司で白虎のラヴィッシュュ様とのメイドで人間のリンちゃん。

リンちゃんはラヴィッシュュ様の屋敷で「ちいさきもの」と呼ばれているわたしたちからすれば子猫としか思えない生き物のお世話をします。

他にも黒狼のバリデス様の屋敷でメイドをしている落人、ナミちゃん。今のところこの三人がこのあたりで生活している落人だそう。そんで四人目が私、岸芽衣なのです。

芽衣と呼べないこの子達に、めえちゃんめえちゃんとじつちが羊か分からんぞーな状態のあだ名で呼ばれます。

ただ一人、正しい発音ではつきりと名を呼んでくれるのがノルティさまです。

白銀の髪に青の柔らかい瞳の美人。

ああ、毛皮もふもふで来てくれたら、もう少し愛想も考えないでもないけど・・・。

「お言葉ですが、ご主人様。バリデス様の毛ブラシで梳いておけば、捕食対象から外れることが出来ますわ。彼らのボスがマーキングした事と同じなのですから」

「だが、そのおびえ具合、かわいそうだと思わぬか?」

その言葉には笑つて力説しておいた。

「かわいいじゃないですか！」

特にこのおびえつぷりつたら、イケナイ妄想に走りそ�で困るくらいですわ！！

「では、その・・・私の毛づくろいも頼みたいのだが・・・」

な・ん・で・す・と！

はあはあしながら血走った目で、ノルディ様見てしましたよ。確実に引いた感じが漂いますが知りません！

ノルディ様が頬を染めていたよな気がしますが気のせいなのです。

「・・・それでは、あのお姿になつて下さると言うことですね・・・」

・
あの、雄雄しくも逞しいもふもふの王！

巨大な角も優美な、長毛種の鏡のような立ち姿。あの悠然とした彼を見たのは、悲しいかな、数えるほどでしかないのです。

あの憧れのもふもふの王様に、い、このブラシを入れることが出来るなんて・・・！！！

メイドブラボー！

異世界万歳！

来たれもふもふの神！

ノルディ様に、子羊たちががんばれー、とか、もう一聲！ とか発破をかけていたけれど、この際そんなものは無視！

期待に満ちたまなざしきらきらきらと見上げたら、ノルディ様はほんのり頬を染めて目を伏せた。

・・・まあ、ね。その後も私の仕事は、毛づくろいです。対象物件がすこーし変わりましたが。

もふもふは変わらず。サイズかな、問題はー。

・・・ああ、でもさ。生殖可能だつたなんてもつと早く教えてほしかつたなー・・・。

いろいろあつたけど、私のいまの立ち位置は。

なんでかな、ノルディ様の奥方です。

だれだよ、羊って温和で優しくて臆病だなんてイメージ刷り込んだの。

闘牛ならぬ、闘羊とうひつつてものがあるくらい、気性の激しい生き物だつたなんて、もっと早く教えてくれよおおっ！

羊の国から「さひて」とひむわ。2

拝啓、お父様、お母様。お元氣ですか？

日々はつがなく、過ぎております。

見渡す限り、白く、といひに茶色のふわふわもいきの海です。

細く高く響くいななきは、魅惑の旋律です。

わたくし、人生を謳歌していますわー。日々、こまこまが治まりないのです。

白いそれに癒されながら毎日、仕事にせいを出していくます。

はるか異世界にいらっしゃる、お父様、お母様。

・・・萌衣は元氣です。

「めえちゃん、めえちゃん、この草おいしいね~」
もつしゃもつしゃ、草を食べながら可愛いあの子がこいつとわらう。

・・・はあん、その緊張感のなぞ、ナイスだわ！ 張り詰めた緊張の糸をぶつた切る、その微笑み爆弾！ あああん、至福！

運んできた甲斐があつたよ！ 死ぬかと思う登山道だつたけどね！ 愛だけで人跡未踏の山地を乗り越えることが出来るって、始めて

知つたよ！

肩に食い込んだリュックの紐の痛みだつて耐えられるつてモノよー。

手に持つたブラシを握りつぶす勢いで、激しく身をくねらせるわ
たし、あら、ヘンタイではありませんよ。

わたくし、岸 芽衣は落人おちやうどと言いまして、時折異界から落ちてく
る人間なのです。

そう、・・・人。

この世界には「獸」と、獸から人へ変化できる「上位種」と言つ
力ある者の二通り、存在します。

「人」は落人しかいません。

人型から変化する事のないやわな皮膚、やわな爪しかなく。やわ
な牙すらない私たちは、この世界にとつて異種族なのです。
そんな落人を保護することが「上位種」には義務付けられている
そうで・・・。

私の保護者で、お仕事を下さったご主人様は、羊族の「上位種」、
煌く白銀の雄雄しい羊、ノルディ様です。

早いものでこの世界に落ちこちて、もう一年が経ちます。
最近の私の仕事も板に付き、可愛いもふもふパラダイスの中、日々
々楽しく暮らしていなんですが・・・。

このほんわりと、温かな笑顔。この笑顔こそ、羊ちゃんのステイ
タス！

キングオブ癒し。いや諸説ありますよ？ 特に猫のにくきうは侮
れないと思うのです！

特にこの登山の折によつた猫の国。

落人のりんちゃんが抱いてたミルティちゃんの、目玉つぶす勢いの愛らしさとか、途中の狼属国犬領で出会つた、ななちゃんのそばにいたボルゾイとかね？

アレよね、ナルトに対するサスケみたいな？（あら、ダメかしら？）

ぶらつくな執事様とカワコイ眼帯のあの子みたいな？（これもダメかしら？）

猫族と犬族の言葉に言い表せないかわいらしさ、愛おしさを眼にすれば、癒しとは何ぞや？ と考え込んでしまつ次第なのです。

究極の悩みよね？

犬の尻尾か、猫の尻尾か。

犬の耳か、鼻の可愛さか。猫の耳の敏感さか。

「・・・確かに私の尻尾は短いし、耳もそう敏感ではないが・・・

「あら、ご主人様の尻尾が必死にぴるぴるしている姿は、言葉に言い表せないほど愛らしいと思いますわ！」

そうよね？ 尻尾の長さ、機敏さもいいけど、必死に動かして存在をアピールしてますつて雰囲気も捨てがたいわよね！ そうそう、それからそこに羊の抱き心地とぬくもりが加われば、クリティカルヒットでダメージポイントは高いのですわ！

あのふわもこな触感と、ほんわかした笑顔。気が抜けまくつて緊張感のかけらもなし。

ああ、癒し系！

羊つてこうじやなくちゃ！

「・・・芽衣・・・。褒めているのか、貶しているのか、紙一重だと・・・」

「まあ！ けなすだなんて、そんな！ 体全体でラブを叫んでおりますのに！」

「・・・わかつた、わかつた。では、そろそろ、私の話も聞いて

ほしいのだが・・・

「仕事がありますので後に願います！」

断じて、人型だつたから冷たくしたわけではないのよ。

切つて捨てた後のノルディ様の、があああンとした顔も、その瞬間ぴこっと出てた耳も、ぴるぴる震えて・・・はうつ！ いけない、ここで情に流されでは！ なぜなら私は・・・仕事中！

肩を落として去つていくノルディ様の後姿に哀愁を感じたけど、仕事中に人型で来るほうがいけないのよ！ 羊の愛らしいお姿だつたら、万に一つも休憩しようか、息抜きも必要よね、と思うかもしないのに！

何度も、初めてお会いした田の姿にと、お願いしているの・・・。

「それでは話が出来ん」とおっしゃつて、拒否されるの。でも、羊体型になつてもお話は出来るはずなの。子羊ちゃんだつて、この獣体型で言葉を話しているのにね。

「人型じやないと話せない話つて何かしら・・・？」

小首を傾げる私。それでも手は止まりませんよ！ 並んでる子羊ちゃんの毛並みに沿つてグルーミング。

あらら、キミタチ、今日はどこで遊んできたのー？ 小枝や葉っぱが一杯絡まつてゐるわ。

優しく丁寧に、じみを取り、梳り、艶を出す。ああ、いいわ。いいわあ、この手触り・・・！

ふわつふわの、もつこもこ・・・！

だんだんと眼が血走つてゐる気がしたわ。引かないでね、子羊ちゃん。あ、慣れたつて？・・・うん、それもどうかと思つわよ・・・。でも、私以外の誰かに触らせちゃダメだからね？

「おわさま、きゅうこんまた失敗したんだね～」

「球根？ はっ！ 新しい食感の新しい草ね！」

「めえちゃん、そうじやなくてね・・・」

「新しい草の開発も、がんばってるのよ！ またあの山越えて、草を運んでくるからね！」

びしつと指差すは遙か彼方に聳える断崖。

そこに魅惑の味わいの牧草があると聞いたら、取りに行かずにはられまじょうか！

「めえちゃん、命かけてるね・・・

「当然よ！」

ノルディ様の采配に感謝して仕事をこなし、百一十パーセントの満足を子羊たちにしてもらうのが、私の使命。それこそが、私を拾つて、保護してくれて、あまつさえ、仕事の斡旋までしてくれたノルディ様への、「」恩返しなんだからー。どんなに苦しい道のりだって耐えて見せるわ！ほり、ブラッシングを待つて並んでいるこの子羊ちゃんたちを見れば、癒されるつてもんよ。

可愛いじゃないの・・・。

「うふ。うふふ、うふふふふ・・・今日はね、とつておきの、ブラシなの・・・」

この笑顔のためならば、あの山のてっぺんの、香りのいい草をまた摘んできてあげたいと思つのよー！

「めえちゃん、めえちゃん、いつの草もおいしいねー。おれをまた持つていつたら喜ぶよ？」

「ノルディ様は長様で、大人ですから、」自分で行かれるでしょ

「

むしろあの険しい山道だつて、散歩にしかならない。

悠然と佇む山の王者を想像した。ああ、格好いい。どうしてあの体型を取つてくれないのかなあ・・・。

憧れのもふもふの王。理想の体つきで理想の角なのに・・・。

初めて異界にやつてきた私を支えてくれたあの優しい瞳を、もう

一度間近で見たいだけなのに。

ノルティ様の身長は、158センチの私を超えてはるかに高いのだ。あの青い優しい眼を見るためには、羊体型になつてもうつて一度良いのに、や。

半分なみだ田で可愛い羊君たちのこのひらひらした体をマッシュサーディしていった。

「め、めえちゃん、くすぐつた・・・きゃん

毛並みに沿つて丁寧に、^{くしけず}梳る。ここね？ ここが好いのね？ あららあ、震えちゃつて・・・ああ、いいわ。その悶え具合・・・！

「うふ・・・うふふ・・・うふ、はあはあ

すりすり、なでなで。ああ、ふわふわ。

「きやあん、めえちゃあんん」

小さなふわふわ子羊が悶えのあまり、なみだ田で見上げてきた。
・・・あ、やばい。鼻の奥が痛い。一瞬どつか違う世界に飛んで
つたよ。・・・でもまたトリップするのはいやよ！ だつてこい、
天国なんだもの！

ふと見れば。

小高い丘の上にノルティ様の瘦身優美な姿があつた。遠くビームでも望めるそこで、彼はじつとこちらを見ているようだつた。

「あ、おわわま～」

「おわわま、がんばれ～」

子羊君たちは、ノルティ様に手を振つて、しきりに応援している
ようだ。

ノルティ様の顔に淡い微笑が浮かんだ。

ああ、ノルティ様も、子羊たちの癒しパワーをもうつて元気が出
たのかな？

ノルディ様が子羊たちに手を振り返した。

それに気をよくした子羊がまた手を振るうとして・・・「ロロ」と後ろにでんぐり返し。

・・・なんて、ツボを押し捲るの、キミタチ・・・！ 危うく鼻血が出るところだつたよ。

しかし・・・何に対しても「がんばれ」なのかな？

羊の国からいじめちわ。2（後書き）

嫁以前のお話でした。

田指すは絶界の、断崖の壁。

あの山の頂上に薰り高く栄養も豊富な牧草が生えていると聞いたのは、異界に落ちてまもなくの頃だつた。

日々可愛い子羊たちの世話をし、癒されまくつてた私。この御礼を子羊たちにしたい。有り余る愛らしさを惜しげも振りまいてくれる君たちに御礼をしたいのよー！

おいしい草を食べて幸せそうにほんわかと笑う子羊たちが見たい！ 激しく見たい！

きつとおいしい草を食べて、初めての食感に眼をきょとんと見開いて、ぱあっと顔色がぱり色になつて・・・と考えたら、行かずには居られなくなりました。

行つてくる！ 誰が止めても行くからね！

みんなが身もだえしてもこもこになつむぢやつぢやつおいしい草を、摘んでくるからね！

でつかいリュックを背負つて山道を歩くこと数時間。足を前に出すのも億劫になつた頃、ようやく前が開けた。

眼下に広がる大地。

あそこが狼の国かなー？ それとも猫の国かなー？ いやいや、豹の国かもしれないし、鼠さんの国かもしれないぞ。羊の国はどこかなーって見ていたら。

「・・・まつたく、根を上げるかと思っていたのに、登りきつてしまつなんて・・・」

声がした。

「ノルディ様」

背後に光を受けて佇んでいる、牡羊。白銀の毛並みも麗しく、けれども雄雄しさは変わらない。大きな角の優美な、力溢れる生き物。私の今までの人生の中でこれほど優雅で、壯麗な獣はない。

見つめるまなざしは青。優しい顔立ちの中に、凜とした心が通っている。獣なのに、獣ではない彼。

「わあ、暗くなる前に屋敷に帰らないと、小さき者たちが泣き出してしまう。早く草を摘みなさい。芽衣が立っているその苗場の影に、香り草が生えている」

ノルディ様が首を揺らすと、空気までが色を変える。切り立つた山肌に、雄雄しい牡羊。彼に見守られながら、私は急いで草を摘み始めた。

草をリュックに詰め込んで、満面の笑顔で振り返つたら、ノルディ様が頬を染めて目線をはずした。

ここまで迎えに来てくれた彼に感謝したくて、でも『えられたものはすべて彼の持ち物で。だから、今、一番艶がよくて薰り高くて、柔らかそうな草を彼の前に差し出した。

「ノルディ様、迎えに来てくれてありがとうございます、これは私の気持ちです。今日一番おいしいところですよー」

何かをしてもうつたら、何かを返すのは人間にとって基本中の基本だ。

だから、このお礼について何も深いことは考えていなかった。
眼を見開いたノルディ様が、小首をかしげて、（あああん、惱殺

ボーズですね！）

「・・・受け取つても、良いのか・・・？」

と聞いてきたので、何も考えず、私はにつこり笑顔で頷きました。
なぜか、頬を真っ赤に染めたノルディ様が、嬉しそうにもぐもぐ
しているのを、役得とばかりに堪能し、その背中のふわもこ加減を
味わっていた私です。

さて帰ろうか、と思つたとき。

ノルディ様の前に一頭の牡羊が現れました。

白銀優美なノルディ様と違つて黒い荒々しい感じの羊さんです。
しかも「ミニユニークーション」とろうにも、頭に血が上つているよう
で、しきりに足元の土をけつています。

・・・どうやら、私たちは彼の夕ご飯を取つた邪魔者のです。
けれどもノルディ様はちょっと腰が引けた私を庇つて前に出ると、
大きな角を悠然と振つて見せました。

自然界において大きな体格、大きな角は種族の優劣を決定します。
明らかにノルディ様のほうが角は大きく見事だし、体格だつて大
きいのに。

・・・なのに、黒い羊はノルディ様に決闘を申し込んだんです。
ノルディ様の眉間にしわがよっています。

えと、何を言い合つているのかわからないのが難点ですね。

お互いに遠吠えのような声を出し合つて、真意を測つているよう
です。

そしたら。

「・・・、ふざけるな・・・」

と、ノルディ様がうなり声を上げました。

決して大きい声でも、恫喝する声でもないのに、背筋がぞつとし

ました。

ちらりと、私を見たノルディ様が、きつと相手をにじみつけ、角を見せ付けるように相手に示しました。

相手も、低くうなると身を低く保つたまま、角を前面に押し出してかかってきます。遣り合いつもりのようです。

「ノルディ様！」

「芽衣は下がっていなさい。誰が主かを忘れてしました、哀れな獣です。・・・わたしの大事なものまでよこせと言つてきましたからね、報いは受けてもらいましょうか」

やつと両思いになつたのに！とか。私の嫁に手を出そうなんていい度胸ですね！とか言いながら、大きな角でがつんがつん、やりあつてます！・・・殺り、あつてます！

・・・つて、言つたか・・・ノルディ様、両思いの、しかも嫁、いたんですか・・・。

お屋敷内には、小さきものと呼ばれる子羊軍団しか居ないので、知りませんでした・・・。

わ、なんか、鼻の奥がつんつとして、痛いです。じわじわと瞳に痛みが伝染して、視界が涙でにじんでしまいました。

あれ、やだな、しかもなんだか、胸も痛いのです・・・。

ノルディ様のような立ち姿も美しく、力に溢れた牡羊はきつと引く手あまたなのでしょう。

きつとハーレム状態で、うはうはしてるんだ。きつとそうだ。

私が気づかないだけで実は、小さきものはみんなノルディ様の子供だつたりしちゃつたりなんだ・・・。

わたしは・・・わたしは・・・。

「つづく。ベビーしつたー・・・」

涙をこじらえている間に、ノルディ様は猛々しい牡羊に勝利していました。

深い悲しみが胸を襲います。

何でこんなに胸が痛いのでしょうか。

・・・ノルディ様に両思いの彼女、もしくは嫁が居るつてことがことのほかショックだつたようです。

でも、泣いてはいけません。こらえます。

折角ノルディ様が迎えに来てくれて、もつふもふのふつかふかのお姿を、披露してくれて、もふもふ独り占め！ なパラダイスなのに・・・。

ふかふかのふわふわの癒しの存在、睡眠誘導の神なのに。胸の痛みで眉がよつてしまつて、いけません。

山からの帰り道、おつきなリュックを背負つた私をこれまで背中に乗つけてくれたノルディ様と二人きり。

心躍るはずのもふもふパラダイスを堪能することも忘れ、どこか上の空で、お屋敷へと帰りついた私は。

ノルディ様の背中から降りる前に、子羊たちに抱きつかれもふもふに埋もれてしましました。

「めえちゃん、心配したの。だいじょぶ？」

「めえちゃん、おささま、ふたりきり」

「でえとだ。でえとだつてみんなが言つるの」

「めえちゃん、でえとつてなに？」

でえと。・・・ノルディ様もお嫁さんと草原でえと、するのかし

ら。

ああ、胸が痛い。

そしたらひょいともふもふパラダイスから抱き上げられてしまい
ました。

ノルディ様の逞しい腕。・・・腕？

間近にノルディ様の壮麗優美なお顔がありました。
息も止まるつてもんです。

「芽衣、芽衣が私のために選んでくれた、あの草はとても喜かつ
た」

ノルディ様がそう話したら、子羊たちがぱあっと顔を明るく
してキヤツキヤツと笑いあつた。

みんな口々に、「やつた～」とか「おおおお、おめでと～」とか
言つている。

・・・何事でしょ。

あの草は、お迎え、苦労様ですの気持ちだつたのですが・・・。

「芽衣が私を番に選んでくれて、私は嬉しい」

「・・・つがい・・・？」

「やつと両思いになれた。わたしの、芽衣・・・」

その後、熱烈な口付けに翻弄されて、気が付いたら寝室で。

あのときの勇ましいお姿からは考え方ないくらい優美な方から
の執拗な求めに、涙も声も枯れ果てました。

・・・おいしい草を異性に分け与える事が、求婚に相当する行為
だつたなんて知りませんでした。

・・・ああ、それ以前に一生懸命ご飯を『与えてくれていたノルディ様の行為が、この世界における求婚だつたなんて。

そして、彼の中ではあの時すでに、「西風」の「嫁」認定された自分がいたなんて。

・・・私は知りませんでした。

あの時感じた胸の痛みも、鼻の痛みも無くなりました。

今は泣きたいほど悲しいことはありません。毎日が充実しております。

ノルディ様と、かわゆい子羊たちと、毎日もふもふに囲まれて、私は今日も元気です。

「芽衣」

「・・・お仕事が先ですわ！・・・で、でも、その・・・羊さんの姿になつてくださつたら、ブラッシングの順番を変えても・・・良いですわ」

顔が赤くなつているのは自覚済みですので、突っ込まないでくださいね！

でもこんな言葉に、嬉々として姿を変化なさるノルディ様もどうかと思う今日この頃です。

そして、これほどまでにキュートな羊さんが、私は・・・だいすきです。

井の園かわいじながま。3（後書き）

楽しいお祭りでした。快くオッケーしてくださった皆様に感謝いたします。

井の園かわ置かせしむるは、いわくや。一（前編）

思ひあつてねむるは、いわくや。
今年もよろしくね願ふべしや。

羊の国から明けましておめでとうございます！

拝啓。

お父様、お母様。

明けましておめでとうございます！
そちらは寒くはないですか？

こつちは寒くても、天然羊毛100%でぬくぬくです。
外の寒さがうそみたいに室内はあつたかいのです。

お世話になつてゐる羊族の上位種、ノルディ様の居城には、居間に
普通に暖炉があるのですよ！

そうです。憧れの暖炉！

赤々と燃える暖炉の前で、羊毛100%の長様と子羊たちともふ
もふで、ぬくぬくなんです。

ああ、お餅焼きたいわ。あ、いえいえ。

あんまり気持ちよくつて暖炉の前で寝むりついとも暫し。

そんで、朝起きると傍らにはノルディ様だけつて事もしばしば。
暖炉に照らされて、ノルディ様の秀麗なお顔が間近にあつてびつ
くつすることもしばしば。

・・・ああ、心臓に悪い。

・・・話がそれてしましましたね。

お父様、お母様。

新年早々はそつちの世界が懐かしく感じられます。

ビバ紅白ですね。コタツでみかんですよね。年越し蕎麦はおい
しかった？・・・あ、そうではなくて。

みなさま、悲しんだりしていませんよね？

たとえそちらに帰れなくとも、あなた方の娘は、元気に精一杯生
きております。

郷に入つては郷に従え、ですからね。

拙いながらもしつかり、こちらの流儀に則つて、新年の行事に取り組んでいます。

だから、ご心配なさらいでください。

あなた方の娘は、今日も前を向いています。

「・・・で」

白銀の長い髪をかすかに揺らし羊族の長であるノルディさんは、目の前の少女に問い合わせた。

目の前には黒髪、黒い瞳の愛らしい娘がひとり。

文字通り天から降ってきた、私の花嫁。

空がきらめきを増し、風が急を告げるそこで、私は掛けで舞い降りた（いや、長様脚色しそぎ・・・）運命の少女。

瞳の優しさに、声の麗しさに、優しい手の感触に、頬のすべらかさにいつしか囚われ、目が離せなくなつていた。

生きる為に、その瞳で見つめ探す姿は、好ましく写つた。

いつの間にか、自分の仕事を見つけ出し、周囲とも溶け込み、朗らかに微笑む姿に心疼いた。

・・・もつと、わたしを、頼ってくれればいいのに。

その娘のうるうるとした眼差しに引き込まれ、いつしか恋に落ちていた、ノルディさんだった。

・・・が。

周りの羊族は色めき立つた！
特に長様を子供の頃から見ていた長老達の勢いは、増すばかり。

長様の恋だよ。長様の！

並居る美姫に目もくれず、仕事に明け暮れていた朴念仁の長様の
！・・・こ・・・恋！

・・・羊族が誇る長様は、眉田秀麗、実力本位の高物件、なのに
今だ番はおろか、子供の一人も生まれなかつたのだ・・・。

どうしちやつたんだ、長様！　まさか不能じやないよね、長様！
その若さ、その美貌、その頭脳に囚われた娘達の、誘う眼差し、
艶冶な仕草にも囚われなかつたあの方が。

最近じや仕事が恋人なんだね、と長老達も諦めと共に呟いていた
ものだ。

わしらが生きているつちは、長様の子供を見るなんて夢のまた夢
なのかもしぬないなあ・・・。と言い合つては、がっくりと肩を落
としていた彼ら。

それがある晴れた日。

空から降つてきた娘に微笑まれて固まつた長様を見て、彼らは目
を疑つた。

あの、そつぬい長様の、娘に対するぎこちない動き。
触れる指先に電流が走つたかのような、長様の身の振るえ。
目の前を通り過ぎる娘の残り香を探すかのように、後を追いかけ
る長様の眼差し。

「「「これは、まさしく」」

花嫁、到来！　いやいや、気が早いか？

盛り上るのは羊族の長老の周りだけだが……。

当の本人は、長老達に、淡い初恋の疼きを逐一報告をねていたなんて知らないのだ。

・・・ちなみに報告していたのは子供達。

「あのねー。あのねー。めえちゃんがここにいたとしたら、おささまがびくとしたのー」

「まつかだよねー？」

「うん。おささま、真っ赤っかー」

「めえちゃんのおひざにプロンくると、おそれおの皿がこわーのー」
「めえちゃんやんこはひざしてかひつと、おそれおの皿がこわくなーるのー」

「じじれま、ねやわおひざーのー。めえちゃんと一緒にお風呂のやくそくしたのに、ねやわおがダメってめえちゃんにこったのー」
「じひつじは」ひつじだけで、はーるのがトントウなんだつてー
「トントウつてなにー？」「」

子供達と張り合つてゐる長様の姿が皿に浮かび、長老達はあまりの不憫に涙（笑こ）をこらえた。

「皆の衆。こはひとつ、わしらが手をかさとと・・・・・」

「えいじゅ、えいじゅー・」

「じじゅ、ひとつ。こはつのはー・」

長老の一人が小冊子を差し出した。茹向のやたら、ラメピンクの本だ。

「・・・ほほお、「あなたの心をがつちりキャッチ。」スチュー
ムこもこだわつて」か・・・・

どつから持つてきたんだ。そんなもん。だが、爺達は真剣に覗き込んでいた。

「ほおほお」

「わしらが頑張らんと、いつまでたつても長様の子供は見られんぞ！ こにはひとつ・・・」

「めえ殿にお願いするかのぉ・・・」

長様を見つめる長老達の眼差しは、日に日に真剣さを増していくた。

押せつと瞳が、拳にこめられた力が、物語る。

・・・が、本人、まったく気付いていないのだ・・・。

今日もまた、芽衣の仕事場に急いで、ものすごい勢いで仕事を切り上げた有能なノルディイさんを見つめる長老達の目は。・・・痛かった。

「・・・芽衣。それは、なに
その身を飾る白いもふもふは・・・？」

「え。だつてウサギ年ですから！ これを編むのが羊の国の常識だつて教えてもらつたんです！」

似合う？ 似合つ？ とにかく笑顔で迫る愛しの芽衣の頭には、

くるんと帽子。頭全体をすっぽり覆つ、その白いもふもふの頭上に。

ぴょこんと、耳。

中央はわざわざ毛色を染めたのかピンクの色あわせだ。

そして振り向いた可愛いお尻に、白いぽむぼむしたしっぽ。白い両手には大きい獣の手の手袋が。足にも同様の真っ白いもふもふの獸足の靴下？ ・・・いやルームシューズ？

・・・必死にそらした目線は、それでも胸元のもふもふを見逃さ

なかつた。

胸元を飾るもふもふは、ボディラインを露にするときついよつは、食べじろボディを隠していたが、その威力や凄まじい。

どこから見ても、食べじろのウサギさんだ。後姿に欲情しない狼オオカミがいるだらうか……？

「・・・芽衣・・・」

「どうですか？ 力作なんです！ がんばったんですよー。」

ぐるりと一回りして見せた可愛いウサギさんは、につこつと微笑んだ。

「長老の皆さんが教えてくれなかつたら間に合いませんでした！ 今年は卯年だから、じつこのを編むんだよーつて・・・毛糸だつて沢山頂いて！」

「・・・長老、が

これは、褒めて好いのだらうか。それとも何を馬鹿な事をと怒るべき？

ああ、そうではなくて、そもそも、そんな風かぜあつたつけ・・・？ と、ぐるぐるするノルティさんを横よに。

「あんまり、いい出来だつたから、沢山編んだんだです。それで、これを持つて新年の挨拶代わりにあちこちの国にお邪魔しようかなー？ つて・・・」

ウサギさんの国ははずせませんよねー。？

これとおそろいの帽子と尻尾つきのもじゅうブルマ、編んだんです。冷えは女の子の敵ですからー。

「・・・・・・芽衣・・・・ばくだんを投下する気なんですね？」

ウサギの国の敏腕ウサギさんの齎す冷たい視線を想像して、背筋

が寒くなつたノルディさんでした。

ウサギ国と国交断絶は痛い。痛すぎる。

「・・・おやめなさい・・・」

「ええ? どうですかー?」

可愛いのにー! おそろいなんですよー? ほかの国の落人たちと、もつとお近づきになりたいのにー! だから頑張つて、夜なべして編んだのにー!

可愛い娘さんが頬を真つ赤にして言い募る。・・・しかもぱつちり、ウサギのコスチュームで。

身を捩るたび、頭上の耳がピコピコして、多分、お尻についた尻尾がぴるぴるしていに違いないと思つたら・・・・・!

その可愛らしさに、ぐつとつまり、頬を染め、早々に白旗を掲げたノルディさん。

周りの長老の目がよりいつそつ、なまたたかーくなつた。子供達のつぶらな瞳が痛い。

彼らはもとより、愛しい娘の眼差しから(無理やり意識を総動員して)目線を(力技で)そつと外すと、・・・分かりましたと、呟いた。

「・・・ウサギさんグッズは、私が後で馬族さんに頼んで送つてもらいますから。・・・ウサギさんと猫さんと犬さんと狼さんと鼠さんと豹さんに竜さんに、蝙蝠さんに、それから当の馬族さんと・・・・・・・・・・・いつたい、いくつ作つたんですか、芽衣・・・

「

「え。落人さんの数だけです!」

白くともこもこな、ある意味爆弾並みの破壊力を持つであろう代物に、ノルディさんは徐々に力が抜けていくのを感じました。

これ、贈る時にそつと詫び状、入れておかなきや、国交断絶になるかもしない・・・。

いや、それよりも、お一人だけで楽しんでくださいと書き記すか・

・?

いやいや、冗談でもまざいかも・・・。

そんな気苦労で田を白黒させているノルティ様の横で、当の娘さんがにこにこしながらギフトボックスを積み上げていた。

「まだまだ！ 麒麟さんとこに、白熊さんとこに、鳥さんに、猿さんに、パンダさんとこなんて、一度行きたいです！ と言つか、絶対行きたいです！ 行ってきて、子パンダちゃんをなで繰り回したいです！ 良いですよねー？」

小耳に挟んだんですけど、ものすごい癒やし系なんですって！ 見てるだけで、ボディブロー並みの衝撃の癒やされ状態らしいですよー！

脳髄直撃の愛らしさなんですって！

実は私、たれパンダも大好きで、あの気の抜けまくった所とか、可愛いですよねー？

「・・・そう。芽衣は、羊よりもパンダが良いと・・・？」

背後からの威圧的な眼差しに固まつた（生存本能！）黒髪のウサギ娘をひょいと抱き上げ、羊族の長、白銀のノルティが立ち上がる。

「あ・・・あれ・・・？ えと、あの・・・のるでいわまー？」

「娘！ よくやつたつ！」

「おお。よくぞ、やってくれた！」

抱き上げられた娘の田には、喜色満面の長老達が万歳している姿が写った。

「え・・・あれ？ なぜに皆様、そんなに嬉しそう・・・？」

さわりと尻（しつぽー）をなで上げられ、びやっと身をすくめるも、芽衣はノルティさんに身をまかせたままだ。

これぞ、気長に存在に慣らした結果とも言つが・・・娘にとつてノルディさんの腕の中は危険領域ではなく、安心安全な絶対領域なのだ。

「・・・芽衣。大熊猫族より私が良いと、言つておくれ」
言つてくれるまでは、離さないからね？

囁いたノルディ様の瞳は、優しい青。でもなぜだか、胸をざわめかせる青の瞳だ。

その迷子のような切ない眼差しに、芽衣は胸を引っかかれたような気持ちになつた。

小首を傾げてノルディさんを見つめ、爆弾を落とす。

「・・・パンダさんも羊さんも、ふわふわもじもじで、幸せなのに変わりはありませんが、わたしの一番はやっぱりノルディさんですよ・・・？」

その言葉に田を見開いて固まつたノルディさん。

「・・・芽衣・・・」

高鳴る心のまま、抱きしめて、唇を奪おうと顔を寄せた時。

「・・・なんたつて、安定感抜群ですからね！」

と、にこにこしながら娘さんがさらに爆弾を落とした。
また背中に乗せてくれるんですか？ とわくわくした顔でノルディさんの顔を覗きこむ娘に、毒氣を抜かれたオオカミ羊さんと、がっくりと肩を落とす羊の爺達。

「ノルディさまー？」

「・・・ああ、そうだな。芽衣。また背中に乗せてあげよつ

「わあ！」

「・・・わああー。いいなー。いいなー。めえちゃんだけいいなー

「」

「ああ・・・むすめ・・・」

何か背後で、長老達が「つめき声を上げ、子羊たちが羨ましそうに足元にジャレついた。

込められた力が、一気に抜けていく感じだった。

やつと、長様が、思い切つたのに！

やきもきする長老の前では、年端も行かない娘一人に翻弄される羊族の長様と、鈍いが可愛い娘の和やかな姿があつた。

「・・・では、私が一番なんですね？」

「はい！ ノルティ様のふわふわもこもこなお姿が一番です！」

「・・・ああ、芽衣・・・！！！」

一人が結ばれるまでには、まだ時間が掛かりそうだ。

井の園から里山を歩いておるだるいわー。(後醍醐)

結ばれ前ですね。

井の国かわ。 審中お見舞い（前書き）

て こわまより、いただいたノルティ様のイラストです。ありがとうございます。
ございます。ありがとうございます。

それでつい、触発されやつてしましました。

・・・これでは、芽衣がヘンタイつチックになるのも道理かと。 も
ふりたい。
もふりたい・・・！

羊の国かい。寒中お見舞い

前略。

お父様、お母様。

「 ちは見渡す限り、銀世界です。

真っ白です。

白一色です。

むしろ白以外無いんじやないかと、思ひとしひです。

・・・ついでに言えば。

寒いのです・・・。

あ、でも心配しないでくださいね？ 風邪なんかひいてませんから。

羊毛百パーーセントの、ふわもこグッズで固めていますので、寒さ対策はばっちりです！

ふわもこのセーターや短パンやらで防寒対策は万全なのです。なんたって手編みですから！ このぞつくり感がいいのです。しかもしかも、しーかーも。

・・・ここだけの話、この毛糸、ノルディ様の長毛で、実に手に入りにくいと言つ、マニアには垂涎の激レア超一級品なのですよう！ あつたかいのです。なんだか、ご主人様に抱かれ・・・あ、いけないいけない。妄想は大概にしないと。

「 に落つこちてから、糸紡ぎの仕方や、編み物も羊族ライフの生きる糧として、また未婚の羊族女子の仕事の一環として教わって、日々成果を挙げています。最近じや、こんなセーターだつて編めちゃうの！

羊の群れに癒されてホンワカしたまま人生終わりそうだったから、そのままじやいかんと、落人の知識をひねり出しました。だつて少

し位はお役に立ちたいじゃないですか。

ノルディック柄を図案化してみたら、皆さんに大受けしました。
ノルディック柄って言つと、『主人様がびょんと反応するので、
面白くて何度も言つてたら、なんか、ノルディック柄と総称されるよう
になつたけどね。

長老と呼ばれる大御所の皆様にも、編み物の腕前を認めてもらいました。

はるか異世界にいらつしやる、お父様、お母様。

願わくばこの手紙があなた方の手元に、たどり着きまやすように。
悲しまないで。あなたの娘は生きています。
悲しまないで。山に、星に、月に、雲に、水に祈ります。

・・・大丈夫、芽衣は、元氣です。

「口口口しながら編み棒を動かすのは年頃の娘たち。
その中に、落人として羊国が預かる娘、芽衣の姿もあつた。
彼女たちの周りには山と詰まれた毛玉の山。
・・・もとい、毛糸球が山積みされていた。
「めえちゃん、ここは？」
「ん。ひいふうみい・・・ひとつ編み目減らさないとダメよ」
「ああ、やつぱりね、うんと・・・」うつかな?
「そうそう」
「めえちゃん、いっちは?」
「色糸を重ねて、くるんで編みこむ・・・やつやつ」
「きれいに編めるといいなあ」

「大丈夫、すごく上手だよ？」

あの人에게あげるの。と少女が笑う。

私はあの人。もう一人がまたはにかみながら微笑んだ。
くふふふ、と笑いながら、女の子たちは編み棒を動かしていた。
染まる頬、赤く、かわいらしい。

その談笑のただ中で、芽衣は幸せをかみ締めていた。

・・・女子会・・・！

これよ、これ。女の子同士で語らう他愛のないおしゃべり・・・

！ お茶に甘いお菓子に・・・「イバナ！

激しく女の子とのおしゃべりに飢えていた芽衣は身悶えた。

最近なぜか、周りを爺と婆に囲まれて、じつとり物言いたげな眼
差しに、貫かれ、こういった会話に飢えていたのだ。

・・・いや、話しだすはいるんだ。

ただ。相手が子羊だったり、長老たちで、話が微妙に通じないと
いう弊害があることに目をつぶらないといけない。

「めえちゃん、めえちゃん。おさわまー、えへってしてねー」

「えへ？」

「おおそうじや、そうじやあー、つこでにしな垂れかかってくれ
ると尚の事良しー！」

「めえちゃんがにこつてしないとおさわまがかあいそーなのー」

「しな・・・？ かあいそー・・・？」

「めえどーの！ わしらの憩いはめえ殿にかかるているのですそつ

「田線はこづ、こづじやつ！ 憂いをこめてのうー」

爺が瞳をぱしばしむせて、天井を見た。・・・くもの巣あつた？
掃除しなきや。

「つるつるの田で見上げれば如何な長様といえども、ぐつと来るに違いないつ！」

いや、力こめて言われてもなんのことやつ……。

「めえちゃんがえへつてしたら、おそれま、がむばるからねー」

「ガム・・・ばる?」

「おおー、そつじやそつじやあー、夜は寝かしてもらえんぞーー!」

「

「「「ねー?」」

「「「のー?」」

・・・いや、キミタチ、今の会話、どう突っ込みを入れればいいの?

羊族の長、ノルディ様の魅惑のお姿を浮かべただけで、うつとうつできる。

脳内にノルディ様の魅惑のお姿を浮かべただけで、うつとうつできる。

「ああ、もふもふ・・・

▽.16917-2294▽

長毛種の鏡のようなお姿は、白銀でどこか処女雪のような雰囲気を思わせる。

思い返せば、後はもう。

「・・・あはああん、いい・・・」

あの長毛筋に櫛を入れて・・・いやいや、まずは描下さいてあげなくちゃ。

やそしく絡まつてのをほぐしてから、おつすべじつべつ、じりすようにブラシでグルーミングして。

頭頂部分から背中、ならかなお尻、かわゆい尻尾と、奮め回す

ように・・・いやだわ、舐めませんよ？ ブラシでそれぐらいた寧に櫛梳つて、つやを出すのです！

実際私がオシゴトした後の子羊たちの毛並みの良さは折り紙付きなのです。

子羊たちの弱いところは熟知しているから、軒並み腰が砕けたようになつてているけど。でもそれくらい気持ちのいいマッサージ効果が期待される代物なんです。（色物じゃないのよ？）

だから、ご主人様だつて魅惑のかなたへお連れできると思つのに。ご主人様は許してくれない。

それどころか、ある日、子羊たちをお風呂に入れて、魅惑のボディマッサージ（毛すき）していたら、なんだか、子羊はそもそもひとり立ちするための訓練で屋敷に来ているのだから、手を掛けすぎはいけないと言われちゃつて。

それからなし崩しにお仕事（子羊もふもふグルーミング）が減らされた。

・・・私の憩いが。

和みと憩いの場をかえせつ。

子羊がだめなら成人した羊さんなら良いのか？ と思つて申告したら、冷たい眼差しで問答無用で黙らされた。あれは怖かつた・・・。

もの言いたげな長老さんたちの目線が痛かつた。おつきなため息吐かなくともわかつてますつて！

子羊ちゃんの毛並みをマッサージしているわたしが、アブナイ人に見えるんだよね。

確かに情操教育に悪いよねー。

はあはあしながら子羊の尻を追いかける女子高生。・・・女だからまだ許容してもらえるのよね。男だったら即効アウト。

以来、子羊グルーミングは減る一方。

その代わりに娘羊さんと談笑しつつ編み物製造が増えてきました。

あ、でもこれがいやというわけではないの。
コイバナ、楽しいし。

誰が誰を好きなんて話をいつそり聞かせてもうりつてじきもの
です。

ただ、ノルディ様の名前が出るたびに、心臓がこれでもか！ つ
て跳ねるのがオドロキなんです。

ノルディ様を恋い慕う娘さんは羊族はおろか、ヤギ族の娘さんに
もいるんですって。

そう聞いたとき、得体の知れない何かが渦巻いてしまって、田の
前がくらぐりしたけど。・・・ きっとあれね。コイバナにあてられ
たんだわ。うん。

ああ、でも。妄想は日々募るばかり。

いつそじ主人様をもふもふしたい・・・！ あ、いかんい
かん。禁断症状かな。私としたことが。

白銀の長毛種の長様。優美なその体にこの櫛を入れたい・・・！
・・・いやまたわたし。

毛並みに沿つてやさしくマッサージをしてあげたい・・・！
・ あああ、待てこひ、わたしたらもう。

・ でもや、きっとダメって一刀両断なんだろうなあ・・・ は
あああー。

自分じゃ手の届かない角だって優しく洗つてあげるのになー。

「・・・めえちゃん、角を洗いますって・・・長様に言ったの・
・？」

「・・・うんそう、何度も洗つてあげますって申告しているのこ
、た、

「主人さまつたら毎度逃げるんですものー・・・」

つぶやいた娘さんの周りで、娘羊たちは色めきたつた。

「これは、お・・・おわわい！」

「め、めめめ、めえちゃん、それって・・・・・！」

「んんー？」

・・・芽衣の手のひらが何か太くて大きなものを支え持ち、ゆつくつしじきあげる動きをしていたが、芽衣の意識はとうにお花畠へ行つてしまつていた。

その仕草を間近で見ていた娘羊さんたちが、頬を真つ赤に染めてうつむいていたなんて、芽衣にはわからない。

「めえちゃんは、長様にあげるのですか？」

「え、何を？」

あげる？

あげるつて何を？

そんな感じで小首をこじこんと傾げた芽衣を見て。
娘羊さんたちはがつくりと肩を落とした。

「・・・恐るべし、天然さん・・・」

「いやあ、求愛行動の意味を知らないからよ、仕方がないじゃない。落人さんなんだから」

「長様も、それを知つてはいるから、無体できないのね・・・」

成人した牡羊の角を触るなんて、婚約者か番の相手しか出来ないことなのに・・・！」

そんな感じでこしょこしょ話し込んでる娘羊さんに芽衣は尋ねた。

「あげる・・・ですね？　このセーターで良いのなら、『主人様に差し上げますけど。・・・？』

「「「「それはあなたが着なさい」」」」

娘羊さん達が指差したものは、ノルディイがわざわざ芽衣宛にとよこした毛糸玉で作ったセーターだった。

芽衣が今編んでいる・・・ノルディイ様の毛糸は白銀なのに光に当てると蒼く輝く珍しい毛だった。

人柄（羊柄）を模して白く崇高な感じがする、一品だ。

したり顔で羊娘さんたちは意気投合する。

天然娘には早い所、マーキングが必要だ。

お目当ての彼が、この天然娘に目を奪われたら元も子もないのだ！長様にはせいぜい張り切つて、娘を落としてもらわねば！

「ちょうど、恋人たちの日が近いのですもの。めえちゃんが長様にお礼を言つたら長様喜びますわ」

「恋人たちの日・・・？」

小首をかしげる娘に、羊娘達は頭が痛くなる思いだつた。

この娘、絶対、長様を意識してゐるのに、わかつてない・・・！

「寒い冬を暖かく一緒に乗り越えましょつて、贈り物をするんですよ」

「ノルディイ様の毛糸で編んだセーターを着て微笑んであげたら、きつと喜んでくれますよ！」

「そうそう。落人さんは獸姿になれなくて寒そうだつて心配なさつていたから！」

「だから、取つて置きの冬毛を毛糸玉にしてくれたんですよー？」

「「「「「めえちゃんにつてー」「」「」「」」

「ノルディイ様は、でも、」

「大丈夫！ きつと喜んでくれますからねー」

そういうて娘羊さんたちは・・・笑つた。

そんでもって。

恋人達の日の当日。

和氣藹々と言葉を交わす恋人達の、その中で。

ノルディ様の毛糸で作ったセーターを着込んだ芽衣の姿を、見つけるなり速効で攫つて行つたノルディ様がいたとか。

雄雄しい羊の姿で、背中に娘を乗せて走り去る、一人の後ろで、爺婆たちが万歳三唱していた。

羊の国かい。賽中お見舞い（後書き）

てごちまあいつがどうぞこました。小話、ご笑納いただけると幸いです。

羊の国からバレンタイン後記。

拝啓、お父様、お母様。いかがお過ごしですか？

こちらはもう雪も消え、花粉が猛威を振るう季節でしょ？ ね。のろわれろ、スギ花粉。

こちら寒いのですけど、ご心配なく。百パーセントカールのおかげで暖かく、日々すゞしくしております。

暖炉の暖かさと、人々の暖かさ。

冬の国は、人（獣？）の暖かさが身に染みます。

ついでに暖かい食べ物も胃に染みます。体重計が怖いこのじるです。だつておいしいんだもん！

お代わりを我慢していると、爺様たちが「嫁の心得」とか寝言を言いながら、器にお代わりをよそってくれるので、断るのも必死です。

つてか、爺様。それいつの時代の情報ですか。女はびっしりした腰周りじゃないと子供を沢山産めないって、戦前の常識、今非常識なんですよー？

でも食べないと、長様が血相変えて、すわ、医者だ、女医は居ないのか、と騒ぎ出す始末でして・・・。

だつて規定の量は食べてるのに・・・。お代わりいらぬって言つてるだけなのに・・・。

増えてないといいなあ、たいじゅう・・・。

明日と言わず今日から、子羊ちゃんたまごお散歩増ややつ。

そんな冬の空ですが、さすがに田中の日差しが暖かさを増したような気がします。

雪解けの音が時折鳴り響き、集落のそばを流れる河の水量が増えてきました。

春はすぐ其処のようです。

今年はじめて咲く花を、お父様とお母様にお贈りします。

願わくば、願いを込めたこの便りが、あなた方に届きますよう。

遙か異世界にいらっしゃる、お父様、お母様。

・・・芽衣は、元気です。

どつと音が鳴り響く。

緩んだ雪の斜面が音を立てて崩れていった。がけ下から上がる水しぶき、雪下から覗く地面は、いまだ色を持たず、茶色にくすんで見える。

だが、いずれ其処も緑の淡い萌えに彩られるのだ。

完全防備の山登りスタイルで身を固めた芽衣は、その雄大な自然を見つめていた。

山の中腹、集落の端。瞳は心細く揺れている。

「めえちゃん、大丈夫よ？」

「長様、強いもの」

「そりや」

芽衣と同じく完全防備の娘羊さんたちのほんわり笑顔に癒されて、淡く芽衣は微笑んだ。

「そうだ。こうして待つっていても仕方がないのだ、と思い直す。

「そうだね！ ご主人様たちが帰ってきたら、温まるよう、屋敷の中のどこもかしこも暖めて、温かい飲み物を準備しておこう！」

何がいいかな？

雪山探検して来るんだから、ミルクよりお酒が良いよね？ ホットワイン？ それともホットブランデー？

ああ、お腹も空かしているだろうから、具沢山のスープなんか良いかも。

彼女たちに声をかけて、芽衣は館へ戻った。

いつの時代も、どこの世界でだって、女は弱いだけではないのだ。「全部の部屋の暖炉に薪をくべようね！ いつみんなが帰ってきても大丈夫なように、暖めておこう！」

「うん、めえちゃん」

「あつたかい飲み物準備して・・・男の人だから、お酒のほうが良いよねえ？」

大人の男の人に対して、ホットミルクじゃいくらなんでも、ねえ。

「うちの人、ホットワインに、スパイス入れたのが大好きなの！」

「私のうちではこういつ時は、ホットワインにオレンジのスライス入れるわよ」

「私のあの人は、ホットブランデーの方が好き。お砂糖ほんの少しね」

「ふううん。日本じゃ、卵酒つて言ってね、お砂糖と卵なんだ

ー

「へええ、いろいろね」

「全部作つておく？ いろいろ楽しめていいかもしないわ。後はそうねえ・・・めえちゃんが、この間作ってくれたあれもね？・・・

・うふふ、きつと長さま喜ぶわ

顔を合わせてくすくすと微笑む娘さんたち。
相手の好みを知っているのって、その人だけ特別だつて言つてる
みたいでうらやましいなあ。

・・・じ主人様は、何がお好みなんだろう・・・。そう言えぱい
つも草だし、人型になつた時、好き嫌いなく一通り食べててくれたな
あ・・・。

「ええと、お酒だけじゃなくて、温まるスープなんか良いよね
?」

「一枚貝のミルクスープ! 彼の大好物なの」

「あらやつぱり、ミルクとバターたつぱりの野菜のシチューじゃ
ない?」

・・・それは羊の国の伝統行事。

毎年この時期、男衆で隊を作り山に入るのだそう。残つた女衆は
帰りを待つてゐるんだつて。

手をふりながら見送つた、雄雄しい羊さんの群れを思い出した。
始め、人型で山に入るのかと思つて、ノルディ様を必死で止めた
んだ。

冬山登山つてあぶないんだよ!

どんなベテランでも遭難するときがあるんだ。

毎年ニュースでよく聞いた。冬山に入るのはとても難しいんだつ
て。あのイモトでさえ躊躇する冬山!

・・・心配する私に、ノルディ様は懇々と説明してくれた。

「私の養い親も、養い親のそのまた前の養い親も、みんな等しく、
私たちに授けてくれました」

それは、聞けば聞くほど形状といい、状態といい、山芋のことだと思った。

草花が茂る頃は生えている場所の特定が難しく、だからあえて冬に敢行するんだってさ。

枯れ残った弦を辿りて、地面に隠れるそれを掘り起していくんだって。

冬の山だからこそ、根茎に蓄えられた栄養が段違いに高いのだつて。

「昔はこれを食べねば上位種になれぬと信じられていた食べ物ですね・・・だから館で預かる小さきものには、必ず冬これを与えるんだ。まあ、おまじない、と詰つか・・・願いだらうね」

それは、切なる願いなのだらう。子供に与えられるなら与えたい。それが毎冬行われることならばなおさら、・・・やらねばならない。

そういう微笑んだご主人様は、誰よりも力に溢れ誰よりも美しかった。

落人で異邦人の私が口出ししていい事じやないと、悟つたんだ。

だから、ノルディ様の服をぎゅっとつかんで、下を向いたまま、「待つてます」と伝えた。

調理場で野菜と格闘する娘羊さんに混ざつて、ジャガイモの皮をむいた。

順調に行けば、戻つてくる頃だ。ただ待つていろより、何か仕事をしていたほうが気が晴れる。

暖炉に火が灯り、着々と、男たちを迎える準備が整っていく。ホットワインとブランデーはアルコールが飛んでは仕方がないので、先に野菜スープを仕上げることにした。

もくもくと皮をむいては洗うの繰り返し。

みんな大切な相手の好みを知っていて、何が欲しいのか想像しては準備に走っている。

それを私はうらやましく見ていた。

だつて、ご主人様のお好みなんて分からぬ。

何を作つてもいつもにっこり微笑んでくれる。美味しいです、芽衣は上手ですね、と褒めてくれる。その言葉にうそはないと信じられる。

でも、じついう時何を準備したら良いのか、さっぱり分からぬのだ。

「めえちゃん、どうしたの？」

「めえちゃん？ なんか、真っ青だよ？」

「めえちゃん？」

「どうしよう、わたし、ご主人様のお好みを知らない……」

衝撃の事実発見だ。

自分の好みを押し付けていただけで、一度も好みを聞いたことがなかつた！

「え、だつて長様、いつだつてめえちゃんの作るお料理とお茶を褒めているわよ？」

「何を出しても褒めてくれて嬉しいけど、ここはこうした方が良いとか言ってくれないの。きっと、お優しいから、あまりに口に合わないものでも無理やり飲み込んでるに違いないの……！」

「すんごい笑顔で自慢されたことあるわよ、私。めえちゃんが「私」のためだけに作ってくれたチヨコレートなんですよ、あげませんからね！つて」

「そこがご主人様のおやせしいところなのよ・・・バレンタインの時期には、ココアを利用してバターと生クリームと砂糖でガナッシュを作つてみた。

粒状のころころしたチョコレートトリュフ。

ものすごく感激して嬉しそうに食べてくれていたけど・・・はじめて見る食べ物食べるのって、勇氣いるよね？

なまこやウニを始めて食べた人と比べるのはなんだけど、インパクトはあつただろ。

娘羊たちも始めは引いてたモノ。

「・・・何も言わるのは味付けに満足してるからじゃない？ 口に合わないなら食べないわよ」

「満足してるわよ。この間の海老のスープだつて、長さも散々会合で自慢してた」

「そうそう。あ、ちょうどいい。海老のスープの作り方教えてくれる？ 今度うちの人が食べてみたいって言つてたの・・・」

元が動物なだけに、この国では肉は食べない傾向です。

肉食ランドじゃどうなのが分からぬけど、羊国は基本草食。

なんちゃってベジタリアンになりつつある現在。お豆と卵と野菜、海草にお魚少し。

それでも落人は何でも食べるつて知つていたからか、ご主人様はわざわざ取り寄せてくれようとしたんだ。

でもやっぱりみんなの前でお肉を吃るのは嫌だったし、そもそも食べる気が起きない。

だから、お肉じゃなくて海産物をお願いしてみた。

海老や貝を食べたことが無い人（羊？）たちばかりだったから、まずはスープと思ったの。

海老、貝からいい出汁が出て、遠くに飛べる味だつたよ・・・。

「大丈夫よ、めえちゃん。眠れまは満足してるわよ！ むしろ満足しそぎでめえちゃんを壁敷から出したくないんだから」

「そんなのわかんないよ、ご主人様の好み、分かってるつもりになつてた・・・！ ああ、わたしたら、一度もお伺いしたことなかつた！ お口に合いますか？ つて」

「いや、絶対長様満足してゐよ。」

お仲間の年頃娘羊さんたちは力が抜けた。
わかつてない・・・!

の子せんせん分かってない……」

「…とか言いそう
「…なんていじらしい」と言うんでしょうが、この唇は…
込まれて十五歳以下は見ちやダメ！ な状況に絶対陥る！
むしろ今の言葉を聞いただけで、速攻長様に襲われる。闇に押し
超激レアなヅツを前に、あの長さまが満足しないはずはない…
誰でもない、めえちやんか、長さまのためにだけ作つたある意味

「そりやへ。」んなかんじ・・・うええつー。」

扉の向こうでは感涙に咽ぶ長様の姿が。雪に塗れているせいか、いつもより数段白い。

白銀の髪に雪の結晶が煌いて、天然のスパンコール状態の、派手さ。仄かに染まる頬が淫靡です。

そして、こつこつもまして、ややの氣満々の青い瞳！

娘羊さんたちは慌てふためいた。

「……」「一！ 逃げつ、逃げてえええつ！
めえちゃん、逃げてええつ！

羊の皮をかぶつた狼がここにいるよおおおおつ！

でも長さまの眼差しが、怖いので言葉に出来ないの……！
めえちゃん、私たちの目力に気付いて頂戴！

「あ、『ご主人様！』

そんな狼に、獲物はほんわりと微笑んだ。心底安心したと言わんばかりの笑顔だ。

その笑顔の横で娘羊さんの緊張も高まつていく。

「『ご主人様、お疲れ様でした。あの……』
「ずいぶん心配させましたね。でも大丈夫です。みな無事に帰りましたよ」

その瞬間の花のような笑顔に毒されて、狼の勢いが静まつていく。

「……よ……良かつた！ みなさま、『ご無事なんですね？』

「ええ。芽衣。それより……」

「わあ、よかつた！ 怪我した方はいませんか？ みんな心配してずっと御山を見上げていたんです。ああ、『ご主人様、お疲れでしうう？ あちらにスープの準備がされてますから、皆さんでどうぞ。今お給仕しますね！』

「あ、ああ、芽衣……」

差し伸べた手を上げたり下げる。

芽衣は背筋を伸ばし、木の器とスプーンの入ったワゴンを押し出

しつつ、ノルディ様を部屋へいざなつた。

物言いたげなノルディ様の情けない顔は、娘羊さんたちの笑いのツボを刺激したらしい。

一人が居なくなるのを見計らつて、とうとう吹き出した。

「くく、く。お・・・長様、形無し・・・」

「めえちゃん、なんて見事なスルー！」

「無事に戻つたつて瞬間で、今まで悩んでいたことすつ飛んだんだね」

「長さま・・・不憫・・・」

「いやいや、まだまだ」

ホットワインとホットブランデーのポットを手に、娘羊さんたちが後に続く。

大広間では赤く燃える暖炉を前に、男たちが衣装をといていた。欠けることなく戻ってきた男たちの姿に、娘羊さんの顔もほころぶ。

「ホットワイン、スパイス入りで温まりますよ、いかがですか？」「ホットブランデーもありますよ？」

温かな飲み物を手から手へ渡しながら、長い冬の幕切れを祈る羊の国の住人たちだった。

にぎやかなひと時が終わり、館が静まり返つた。

おせつかいな爺様と婆さまたちも皆帰りつき、館に残る者は、ノルディと芽衣、そして小さきものと世話役の羊だけだ。

暖かな暖炉の前で、芽衣はブラシを手に白銀のノルティの毛並みをゆっくりと梳いていた。

赤い光に照らされて、陰影が揺れる。

「・・・皆さん、ぶじでよかったです。貴重な滋養芋も沢山取れて、これできっと小さき者たちは立派な羊さんになれますね」

「そうですね、芽衣」

ゆつたりと時が流れる。ブラシのリズムはマッサージ効果も兼ねているから、思わず眠りに引き込まれそうになってしまふ。

「スープはお口に合いましたか？ やっぱり寒いでしょうか、ホットワインをお持ちしまよつか？」

「いいえ。今はこのまま・・・そうですね、後で芽衣の作った、ショコラシュー、とやらを飲んでみたいですね」

「ああ、今日の・・・」

「ええ。ショコラの香りが素敵でした」

ブラシでやさしく毛並みを整えながら、芽衣が頷く。

今日、卵酒以外に芽衣が作ったものにショコラシューがあつた。娘さんたちに作り方をせがまれて教えた代物だ。

「ココアにコアントローデー入りプランテー入れたんですけど、人気がありました・・・女の子に！」

男の方たちはもっぱらお酒のほうを嗜んでいましたよ？

「・・・そうだったかな？ でもあの香りは、この前いただいたトリュフに似ていて・・・あれは・・・芽衣の・・・かお、り・・・

「

ノルティは眠気と戦いながら、芽衣に身を任せた。

柔らかな娘の膝に頭を乗せて、角を優しくじこかれて。ブラシでやさしく梳られる。

花に届くのはやせしショコラの香り。こつか頬を染めて差し出された丸くて甘い、そつまるで芽衣のよくな。

「蕩けて、しまうよ、芽衣・・・」

「どうとど、まじろんでした。」

夢の中。

「・・・・ノルディ様が無事で良かつた・・・・。怪我をしないで戻つてくれて本当に良かった・・・・」

角の付け根に優しいキスが降りたのにも、気付かずに、白銀のノルディは眠りについた。

田覓めたらさつと、こじらしこの娘は尋ねてくるのださつ。

「ノルディ様の一番のお好みはなんですか?」と。

・・・答えはすでに決まっている。

羊の国からバレンタイン後記。（後書き）

・・・このへた「げふげふ。
襲え！」と思つたのはさくらだけでしょーかー・・・。

羊の国から、春便り S.M.I.L.E Japan (前書き)

心配してくださった皆様へ御礼です。

本当に感謝しております。ありがとうございました。

拝啓

お父様、お母様、お元気ですか？

羊さんの国では、雪も解け、青々とした草が姿を現しています。
ちらほら咲いた色とりどりの花が、誘っているようです。

子羊たちは、春一番に咲く花に、挨拶するんだ、と言つては館を
抜け出し、草原で草塗れになっています。

今日も抜け出した子羊ギヤングを追つかけて、草原にきました。
子羊ちゃんが花に向かって頭を下げて・・・下げた頭が重かつた
ためか、じりんとそのままでんぐりかえし。草に塗れて笑つています。

・・・なんなの、じー。

これ以上の天国つてあるのかしら。危うくいけないとじりに飛び
そうになつちやつたわ。

ビバ、異世界とりつぶ。

ビバ、もふもふパラダイス！

鼻血をおさえつつ、サムズアップも忘れません。

・・・ついでに美味しそうな草のリサー・チも欠かしませんがね。

その笑顔にみんな春の訪れを待つていたんだなあ、と思うのです。

凍つてつく寒さは厳しければ厳しいほど、温かな風に心湧き上がり
ますものね。わたしだつてそうです。

寒い夜は子羊に包まって眠りたいです！
きっと至福極まりなし。想像だけで、『うとうへぶんですよ。飛
べますね。

・・・なのに、なぜかいつも『ご主人様に拉致られます。あれ？

お父様、お母様、『ご主人様つたら、ずるいんですよう！ 雄雄し
い羊のお姿で、高みから悠然と流し田くれるんです！

・・・そうそれはまるで、海辺で繰り広げられる、恋人と白いワ
ンピースのお嬢さんの駆け引きのことく！

あはは、うふふと誘うんです、そりやもう見事な流し田なんです
よう！ あのお姿を見たら・・・見たら・・・おつかげずにいられ
ましょうか！？

否！

そらもう、鼻息も荒く、全速力で追いかけますとも！
ひらりひらりと交わされますがね（泣）こんちくしょー。一本足
が心底憎い！

だが、負けるもんか！ と、おつかげ！
後ろで子羊たちがエールをやんやと送ってくれるのも、『ご愛嬌。
応援してくれるのね！ と俄然やる気が起こります。
まかせて！

今日こそはあの魅惑のもふもふに顔をうづめるの！

必死に追いかける私を流し見て、『ご主人様がふつと微笑んだのを、
見た気がしました。

そこで、はつと気付けば、『ご主人様の「腕の中」なんですよ「腕の
中」・・・。

・・・そーなんです。

拉致されたら、途端に人型に変化なさるんです！ もう、もう、
するいつたらないです！ 人肌いらない、ふわもこふりーず！

羊さんのふわもこの毛皮の中に頭突っ込んでぐりぐりしたいのに

「ひつじ！ 羊型希望！」

「いいですか？」

そんて 強引に○主人様に添し寝された翌日は あちこちに虫を
されの痕が沢山あるのです・・・。

服の中にまで入り込んで血を吸っていく、根性のある虫なんです。しっかりパジャマ着込んで寝てると、なぜ。

今朝也

「また」

ありました

痒みがなしのて気付きにくいやねえ……あらやた 太ももの内側にも。

」などもありました。

しつかり着ていたパジャマを脱いで、戦闘服に着替える途中、またもや発見したそれに、ううん、と首を傾げてしまいました。

いる。確実にいる。

遙かなる異世界にいらっしゃるお父様、お母様。

何かの拍子でこの手紙が届いたら、ぜひバルサンと、蚤取りブラシ（大型犬猫用）を！

・・・いよし。今日も気合入れてご主人様をグルーミングしよう
つと!

「めえちゃん、はいこれ

お友達の娘羊さんが真っ赤な顔でずずいと差し出したのは、手触りのいいスカーフでした。

「メリーチayan?」

はてなを増産しながら、わたくし、娘羊さんを見つめました。おそろいのメイド服を着込んだ彼女の名前はメリー。名前も似て、年も近く、さりぱりした性格の彼女とは出合つた頃からの仲良しです。

彼女は変化する前は、そりや器量よしの淡いピンクの羊さんなんですよ。

長いまつげを見ているとそれだけで、天国にいけます。変化すると淡いピンクの毛並みが、そのまま頭髪になっていて、青い瞳とあいまつてとても可愛いのです。

以前そのままの姿の彼女に抱きついて至福のひと時を過ごしていたら、なぜか彼女の異動が決まって焦つたつて。

可愛いだけでなく彼女は実に有能で、私にメイドのいろはを教えてくれた貴重な人（・・・羊？）なので、必死にご主人様を説得しました。

異動の話が消えるまで、メリーさんと会えなくてずいぶん悲しい思いをしました。

思い返しながら、じー・・・・つと見つめしていました。
あ、赤くなつた。

白いお肌にほのぼのと血の色が乗せられて初々しいやら、可愛いやら。もー、メリーさんつたら女殺し！ いえ、ワタクシ限定かも

しれませんけどね。この初々しさに当てられたる変態は。

「もう、メリーサんつたらそんな顔で見ちゃダメですよ！ 犯罪者が増えちゃいますからね？」

微笑ましくなつてにっこり笑つて、ありがたくスカーフいただきます。

それにしてもナゼでしようか、じうして朝一に首に巻くものを手渡される回数が増えた気がします。

でも寒いので首筋に巻きますけどね。まことに、ほのん、と暖かいのです。

「うふ。暖かいです、ありがとうございます」

「いいえ。めえちゃんもそんなひるひるした田でじつと見つめちゃダメよ？ 変質者はすぐそこにはますからね？ ・・まつたくもー、長さまつたら・・・」

なんだか、メリーサン、お怒りモードのようです。

でも変質者なんていますかね？ 私は自覚のある変質者ですから、省いて下さつて結構ですよ？

あ、でもこれって、好機ですよね。今日こそこそ是非とも胸に秘めていた問いかけを聞いておかなければ！

「あの、メリーサン、その・・・この世界に、蚤取りブラシってあるのかなあ？」

「・・・は・・・？」

「メリーサン、ごめんな、気分悪くしないでね、皆がそつて訳じゃないの！ 子羊ちゃんたちとお昼寝してた頃は虫刺されなんかなかつたもの！ でも毎日ブラッシングしてるので、ご主人様が添い寝されると、その・・・虫刺されが、ひどくて。きっと身体が大きいかから、頑固な蚤が取り除けないんだわ！」

この世界に蚤とりブラシがあるのなら、是非今日から使いたいです！

真剣な面持ちでメリーサンに申告したら。

メリーサンたら、絶句して目を真ん丸く見開いたあと、むにゅむ

「」やと口元を動かして・・・。

「が・・・・頑固な・・・ノ・・・・〃・・・」

「メリーセん？」

だん！だん！だん！ とテーブルをたたきながら悶絶しているメリーサンの前で、途方にくれる娘の姿。
それをそつと物陰から見つめる・・・爺たち。

「「「「・・・・■■■■■・・・・」」」

それぞれがゆっくりと頭をふって、がっくり肩を落としたのを、勿論娘は気付いていない。

なんだろう・・・。

今日は一段と皆の目がなまぬるい気がする・・・。

羊族の上位種、白銀のノルディは、決算書類に目を通しながら、そんなことを思つていた。

書類を渡しに室内に来る、羊族の若者が、私を見るなり目を白黒させているのだ。なんだろう、出直すのか？ 泣くのか？ 笑うのか？ なんなんだ、貴様らいつたい。

その違和感に気付かないほど、私も朴念仁ではない。

それでも仕事のスピードは揺るがない。なぜなら今日もこのあと

芽衣を誘いに行くのだからな！

「押してだめなら引いてみよ、か・・・」

呴いた言葉に、室内に陣取つて茶を飲んでいた爺たちが咽っていた
が気にしない。

過去、落人を娶つた先代の遺言だ。言いえて妙ではないか。

追いかけても追いかけてもこちらを振り返りもしなかつた、子羊、
娘羊ラブの芽衣が。

ピンクの羊毛に包まれて寝ている芽衣を見つけたときは、嫉妬で
メリ一を殺せると思つた。

いくら先々代の秘蔵つ子とは言え、私と芽衣の逢瀬を邪魔する輩
は排除する。

だが異動を告げれば、芽衣が泣いて引き止める始末。

だが、先代の日記を爺に進められるままに読み進むつち（他人の
日記を読むなどイヤだと言つたが、爺にすごい勢いで進められた）
先代もまた同じような苦労をしていたのか、と胸を打たれた。

子羊に嫉妬し、娘羊に嫉妬し、きらきらと落人の背後を狙つてい
た先代。解る。解りますその気持ち・・・！

狙つた落人を褥に誘い込むために行つた、涙ぐましい努力。
仕事を速攻切り上げ、落人の下に通いつめ、貢物をしたが、悲し
いかな人間は牧草は食用にあらず撃沈したとある。

・・・身に積まれる内容に、やがて日記にのめりこんだ。

先代の落人への気持ちと重なる、私の芽衣への思い。届くのどう
うか、この思いは。この思いが届かなければ、先代は・・・ひいて
は私は、芽衣をどうするのだろうか・・・？

読み進むうちに怖くなり、ページを繰るのを躊躇つよつとなつた頃。

そこに一筋の光明が照らし出されたのだ！

物言いたげなそぶりで、見つめると人族はそちらから寄つて来る
と書いてあつた。

田を疑つた。だが先代は一縷の望みに縋りついた。

追わず、見つめ続け、自分の元へ近づくまでじつと佇んでいたら、
落人の方から手を差し伸べてきたそうだ。

指先が触れた瞬間の喜び。瞳が重なつたときの歓喜。全てに感謝
の言葉が刻み込まれていた。

・・・身が震えた。

それでは、芽衣もそうなのか？ そう思つて、先代の仰つたバイ
ブル（日記昇格）の通りに、芽衣の手の届かない高みに立ち、瞳に
言葉を託して見つめた。

ただ、瞳に思いを乗せて見つめていただけだ。

それなのに。

あんなに、あんなに頑なだつた芽衣が・・・！

わたしを追いかけて、来た。

「」の震えるほど歓喜。

ありがとうございます、愛の伝道師（先代昇格）愛のバイブル！

ついに芽衣が私を追いかけ始めましたよ！ 胸が高鳴ります！

・・・あ、ちなみに先代とは山羊族との縄張り争いに競り勝つた、羊族の伝説の英雄。

女傑・サラマンディーさまのことで、生涯の伴侶となつた落人は、人族の侍、新衛門と呼ばれる青年だったそうです。

読み進むうちに内容が怪しいものになつてきたので、これは代々の長、それも落人を伴侶にしたいと考えている長にのみ、閲覧を許可するとしておくかな？

サラマンディーさまを英雄視する者には、少しまずい内容だ。

なんたつて、羊族のサラマンディーさまと、新衛門殿の話は吟遊詩人の歌になるほどの大恋愛と言つ話だつたはず。

・・・落人殿を追い詰めた挙句、最後は新衛門殿にサラマンディーさまが全裸で馬乗りになつて、むりやり搾り取つたとか、後世にばれたら叶わん。

絵姿に残つているが、サラマンディーさまは、燃えるよつに赤い毛並みの美しい、雌羊だ。胸も腰もバイインバイインの、熱烈巨乳美女だ。あれに乗つかられて、子種を搾り取られる・・・天国だろうか、地獄だろうか？

山羊族との戦いだつて本当のところ、山羊族の長の求婚を新衛門殿のために蹴つたからだと言つしなあ・・・。

・・・まあ、なんにせよ、先代は先代。後世に伝え聞く話は、晚

年熱烈ラブラブでいちゃこちやのし通じだつたようだから、ビックで意思の疎通は図られたのだわ。・・・多分。

ふ。だが、私は芽衣を深く愛しているから、問題は、ない。

芽衣も私を愛してくれるはずだ。なんたつて私のほうが、子羊の中の誰よりも毛並みも手触りも最高に良いのだからなー！

さて、今日も黙に戻り、芽衣の氣を引くとしよう。

追いかけてくる真剣な眼差しに身を貫かれ、身もだえするほど歓喜に焼かれよう。

追いかけてくるつむりの芽衣を、その実私の部屋に追い詰めて、その身を拘束しよう。

今宵も芽衣の寝顔を間近で見つめながら、その白い素肌に口付けよう。

芽衣の隣はこれからずっと、

・・・私のものだ。

・・・うん、どんなにかっこいつけても、おそれま、舐扱い。

羊の国から（前書き）

少しでも微笑んでいただけたら、幸いです。

羊の国から

「…………ちんくしゃだな」

「…………」

挾啓

はるか異世界に居られます、お父様、お母様。
のつけからあれなんですけど、目の前のおっさん、敵認識しても
いいですよね？

「羊族のノルディともあうつ者が、小娘一人に惑わされていると
聞いたぞ、本当か？……で、これがうわさの落人か……。
…………………小猿か」

だから、そのタメはなんなんだ！

むきーといきり立つて真つ赤になつてゐる私を、ノルディ様が抱き
寄せて、よしよしといなしてくれた。

田の前のむさいおっさんは、山羊族の上位種、ラグエルさんだそ
うです。これでもノルディ様と同じ年だつて言つんだから、生命の
神秘だ。熊と女神が山羊と羊つてあんた。

大体ちんくしゃ発言だつてね、たいていの女の子は仕方がないと
思うよ！

だつてサイズが違ひすぎる！

あなたの隣に立つて、つりあうサイズの女人なんて・・・なんて・・・いるのか？

ノルディ様くらいの上背ないといけないだろうし、ノルディ様と幼馴染つてことはこの美貌を見慣れているってことだし。

きつとものがい面食いに違ひないね！

ノルディ様と張れるくらいの美貌の主を探しても、そんな美貌の主、早々見つかんないだろうし・・・。

あれ、まつてよ、それ以前に。

まじめじと見上げてしまつた、らぐえるさん＝熊。

「・・・らぐえるさんの初恋つて、もしかしなくても、ノルディ様・・・？」

うわー、ありそつで笑えねえ・・・。

ぱつりと心の中で呴いたはずの言葉。

「・・・」の、ちんくしやめ

は！

いやん、声に出しちやつた！

口をふたわざ、上田遣いで恐る恐る見上げれば。

あ。

目が合ひました。

あ。

すゞい田で睨まれました。

あ。

あああ、でも、そつかー・・・。

腐女子に田覚めて早五年。審美眼は培われていますともー。

まさか、ここにきてこんな展開が拝めようとはお釈迦様でも思つまい。今までノルティ様につりあう麗しの殿方がいなかつたし、それ以前にこここの生活に慣れるので必死だつたおかげで忘れてましたよ、憩いを！

そうと決まれば！

芽衣、燃えます！

「ほ・・・ほほほほほ。わたくし、お茶の準備をいたしてまいりますね！ あ、それともお酒のほうがよろしくでしょうか？」

どっちだ！？

どっちが攻めなんだ！？

絵的には、熊が攻めで女神が受けなんだけど、『主人さまあれで隠れマツチョだから。

・・・しかも、美形鬼畜攻めつて、子宮が疼くのよね。

熊だつて、よくよくよく見れば、結構美形さんときた。

むさいその髭剃りなさいよ！ おっさんと見られるのを良しとしているの？ ああ、年若い長にありがちな、威厳を保つための手段か何かか？ だが、勘違いはいけないよ！ むさいおっさんと、さわやかマツチョじや、月とすつぽんなんだよ！ 腐女子的にはね！ しかも熊のくせに鍛えているのか、無駄な贅肉の欠片もないじやないか。

冒涜だ！

美貌に対する冒涜だ！ 即刻髭をそりおとせー！

俺様熊受け・・・？ 今そんな需要あるかなあ？

「——いな！ 無いなら作るまで！」

硬くじぶしを握りしめ、雄雄しく叫んだ。・・・」

「芽衣？」

「ちんくしゃ？」

「・・・聞き捨てならないな、ラグ。私の芽衣をちんくしゃ扱いか？」

「・・・小猿なら良いのか？」

はるか頭上で熊と女神が、言い合いを始めた。
まあ、それはこっちに置いといて。

ああ、ペン！

切実に今、ペンが欲しい！

押入れのダンボール（小）に入れたままの必須アイテム、ペンに
インクにスクリーントーン。

それが無理なら、せめてパソコン！
田ぐるめく禁断の熊マッチョ受けの世界を披露するのに！

俺様熊を組み敷いて、妖しく笑うノルディ様。・・・あ、いかん。
鼻血が。

なんか、ここに来て、ノルディ様はやはり攻めだと認識を確かに
しました。萌える。

遙かなる異世界に居られるお父様、お母様。

願い通じて宅配便が行き来するよくなつたな。

押入れの「趣味の箱（なか見ちゃダメ！）」をそつくり送つて欲

しい、芽衣でした。

敬具！

「芽衣？ 芽衣、どうしたんですか」

「…………なんか、微妙にずれた娘だな」

頭上で熊と女神が眩いでるけど、気にしてなんかいられない！
うふふ、熊を可愛く酔い潰してー、男を意識させるあの髪を無かつたものにしてー、さらになにノルティ様には俄然やる気になつてもらわなくっちゃああ！

あ、いけない。

犯る気だつたわ！

「…………なんでしょう、悪寒が

「…………お前もか。奇遇だな」

熊と女神が身を震わせている。

さむい？ 寒いなら暖炉に火を入れますが、それより人肌がよろしいかと思われます。この時ばかりはもふもふなんて無粋な事言いませんし、言わせませんよ？

「ぜひ、肉弾戦でオネガイしますー！」

あらやだ、心の声駄々漏れ。

「…………やらいに寒気が」

「・・・ そうか、俺はめまいが

「お好みのお酒を準備いたします、お客様。何なりとお申し付けくださいませ！ そんでもってめぐるめく欲望の彼方へ！」
にっこり。

営業スマイルよ、芽衣。私は今、ぼったくりバーのママー。

「・・・・・う、うむ」

「・・・ そのためなんですか、ラグ」

田を白黒させる熊を尻目に、なぜだか主人様がずすいと私の前に、割り込んできた。あれれ、熊が見えないよー？

「ラグエルは、所用が済んだらすぐに帰還します。もてなしあいのですよ、芽衣」

しんと冷えた氷のような声で、主人様が言い捨てた。

・・・ あつ！

「で、では、ワタクシは次の間に控えておりますので、御用がございましたらお呼び下さいませ！」

慌ててそう言って、きびすをかえした。

いけない、いけない。

大事な熊に女の影なんか見せたくないその気持ち、わかります、ノルディ様・・・！

そつとしておきましうね、芽衣。

長い冬で会えなかつた空白を埋めるべく、見詰め合つて、手を取り合つて、そつと身を近づけあいたいに違ひないんだからー。

うん、胸がずきん。とするのは気のせいなのです。

会えない時間がふたりを燃え上がらせて、抱きしめあつて、確かに

次の間に控えて、あんな声やいろんな声が聞こえてきても、聞かざるを貫くのよ！

別に、ね、かすかに聞こえた「主人様の「・・・は、私・・・も
のだ」にきゅんきゅんしたり、熊さんの「貴様は羊ぞ・・・の、ノ
ルディだ・・・う！」に萌えてなんかいませんよ？ いませんから
ね？

……でも。ビ、どんな構図なんでしょう？

やつぱり、迫るノルディ様に圧し掛かられて、恥じらいに顔を背ける熊でしょうか？・・・いいわあ。

それとも、はかなく目を伏せるノルテイ様に、压し掛けられたする熊でしょうか？・・・ううん？

ワタクシめとしましては、やはりノルディ様は鬼畜攻めで行つて
欲しいところですが、いかんせん押しが弱い様なので、うまく熊に
交わされてしまつてゐる様に聞こえます。

ここは、押さなきやだめですよ、ご主人様！

ぐりぐりと、押しに押さねば、そ知らぬ顔で交わされます！
熊との種族どころか、性別までも超えちゃつた愛ですもの！
ご主人様が押さずして、どうします！

「…………何度も…………言つ…………は、わたしのものだ！」

「ノル・・・ツ！」

「よし！

後はあのむさくるしい髪をそり落として、同衾できるように大き
田のベッドに放り込んで！

・・・でも、ご主人様、あの熊の変わりに、毎晩、私を抱き枕に
していたというのなら。

・・・かーなーり、ショックです、私、小熊ですかー？

「めえちゃん？ めえちゃん？ 何してるの？」

ピンクのメリーさんがいきなり目の前アップで現れて「きやあ！」
と叫んだら、「芽衣！」と叫んで飛び込んできたご主人様に、がば
つとだきしめられてしまいました・・・。そんな情熱的な事は、熊
さんにこそるべきなのに！

「いけません、ご主人様！ 誤解されてしまりますよ！」

「誤解？」

「え、えつと、こ、恋人に勘違いされでは！」

「・・・・・芽衣は、私が嫌いか？」

どこかむつとされた顔でノルディ様が仰るのに慌てました。

「きら、きらいなんて！ 滅相もございません！」

大好きです！

全身全霊でラブと叫びますとも！

ふわふわの、もふもふの、雄大なお姿。理想の偉大な獣の王さま。
抱きしめて毎日でも、もふりたいのに！

「・・・芽衣・・・わたしも、芽衣が大好きです」
毎日抱きしめて、嘗め回して、毎晩挑みたいくらいに。

「・・・へ・・・？ あ、はあ・・・

挑むつて、何に・・・？

「・・・悲鳴を上げたから、心配して飛び込んできたんだが・・・
なんだ、そのグラスは・・・ナーフシティタ、キサマ」

熊さんが心底、疲れたように呟いた。

「え、ええと・・・え、えへ？」

あのですね、これを壁に押し付けて、耳を澄ますと良ぐ音が聞こ
えるんですよー？

あ、でもー、こいつの部屋で声が筒抜けなら、あいつの部屋でも
筒抜けだよねえ・・・。

ああ、何処で燃やせばいいの、私のこの溢れんばかりの創作意欲
(腐女子熱)。

「・・・」いびと・・・デスカ・・・」

「いびと・・・」
いぐえるさんには、将来を誓い合つた恋人がいて、その恋人のた
めに羊族推奨のノルディック柄の毛織物を、注文しに来たんだつて
さあ・・・うええつ。

ちなみに冬寒いこのあたりじゃ、織物の質のよさと、図案が高い
評価を得ている。

絨毯なんて田ん玉飛び出るんじやないかって額ですよ。

去年の出来栄えの良さに注文が殺到してて、娘羊さんに混ざつて
私もがんばつて織りました！

「・・・たしかに見事な出来栄えだ。これを図案化したのが、このちんくしゃだと思うと・・・首を捻りたくなるがな・・・」

才媛と名高いメリーダンの手ではないのか？

「ふざけるな。私の芽衣をちんくしゃ、ちんくしゃと！ 貴様に融通したくはないが、しかし、田出度い席だ。花嫁に免じて譲つてやる！」

「この冬最高の一枚だぞ！」

芽衣が図案化したノルディック柄は人氣で、織つても織つても生産が追いつかないんだぞ！

「・・・ふん。小猿の名を呼べば、その一枚を融通してはくれるまい？ 名を呼び、その織り手を褒めたなら、」

白銀のノルディイが、どうでるかなど、白田の下に明らかだ。

いつたい何年の付き合いだと思うのだ？

「キサマの独占欲など、当の昔にお見通しだ！」

憧れの乳母殿に微笑まれただけで、家から放り出された身の上としてはな！ 寒かつたな、あの時は。

「くつ！」

「・・・ま、如何に想像以上に可愛らしくとも、話の通り麗しの娘であろうとも、貴様の前であからさまにその小猿を褒めることなどできんな。・・・ああ、勿論、俺の花嫁殿がこの世で一番だがな」

はつはつはーと朗らかに笑う熊さん。

「このひげ！」

「ふん、なんとでも言え！ 思いが通じて俺は今最高に幸せなんだ！・・・貴様と違つてなつ！」

「この、熊！」

「ふ、白銀のノルディともあろうものが、落人一人に振り回され・・・いい物を見た！ これ以上はないほど、いいものが見れた！」

あつはつはー！ と朗らかに笑う男の声が、聞こえる。

見送りに立つたノルディ様と熊さんが、何事かを言い争っているようだ。

仲、良いなあ……。

でもさー、やつぱり、現実問題、三次元でのボーアズラブつて難しいんだねえ……。

「良いカツプルだと思ったのに……」「

私は、はあああ、と大きなため息をついた。

いいえ。落ち込むにはまだ早いわ、芽衣。

「IJの世界の娛樂充実のためにも、是非活版印刷技術の推進を……」

まずは、小さな木に反転文字を彫ることよね。

組み合わせで文章を印刷できるようになつたら、本の増刷も可能かもしけれない！

是非、手先の器用な羊さんとお話がしてみたいな。

そしてゆくゆくは。

「異世界初（発？）ぼーいざらぶジャンルの確立を……」

（……いえ、決してこの世界そんなもん求めていないから）

「芽衣？」

「ノルディ様！ 私がんばりますからね！」

「は？・・・え、ええ、がんばって、くださいね……？」

白銀のノルディの切なる願いは、いまだ娘には届かない。

羊の国からあなたの知らない世界

「・・・で、この場合の薄幸少女を、この超絶美形の薄幸少年のR青年に置き換えるんです」

「・・・え、ええ・・・」

各々方、頭の中でれつしミコレー・ショーン・

己の想像以上にすばらしいものはないんだよ？

だつてお好みのままに、好きな相手を思えるんだ。

想像上の相手の誰に自分を重ねるかで好みが分かれるけどねー。

俺様鬼畜受けが好きか、強気子犬系受けが好きかでも雲泥の違いだし、体育会系元気も攻めか受けかに分かれるし、美形鬼畜でも攻めか受けかで細かく枝葉が分かれる。

マニアックな方なら伝家の宝刀、銀縁めがねが登場するだろ？し、リーマンが好きならネクタイの登場だろ？。アイテムひとつ取つたつて、千差万別。

皆様のお好み男子をツリー状に細分化していつたら面白いことになりそうだわー・・・。おとと、話があつちに行っちゃうわ。

さて、娘羊さんの脳内シミュレーション終了を見越して、私はおもむろに言葉を紡いだ。

「・・・男女の純愛物より背徳感が増しませんか？　幾多の困難を乗り越えても乗り越えても、立ちふさがる最大の障壁！　身分の差、種族の差、そして・・・性別の壁。でも好きだった相手がただ同性だったと言うだけで、彼らは何も悪いことはしていないの！　立ちふさがる常識と言つ壁、報われない彼らの思いは昇華されるべき！」

周りに集まつた娘羊さん（こくじくじくと頷いた。・

・・ふ。たやすい。

一ヤリ。と笑いたいのを押さえつけるのに苦労しました。

拝啓。

異世界におられますお父様、お母様。

芽衣は、この世界で、同志を見つけました！
(レベルアップ時に流れるファンファーレを脳内に)用意ください

ぱーいすらぶジャンルの確立も、あながち夢じやないかと思われ
ます。

敬具！

「・・・なんだしうね。最近侍女の田線がおかしいんです・・・

」

・・・ある日、そう呟いたのは羊族が誇る俊英の長わせ。

『見田麗しく、能力抜群、さすが羊族を率いる長わせよ、と如国
の長にも一田置かれる存在の彼。

白銀の髪を揺らし、田線を伏せるその姿は、美の女神像のようだ・

・』

「・・・あ、でも実は隠れまっちょなんですよね、『主人様は、
脱いだらす』いんですから、ここは『美の女神』と言つよつも・・・

「うーん『闘神のよくな』、かなあ」

と、長い睫をぱしばさせて誰ともなく虚空に言い切った娘を、白銀のノルディは抱き寄せた。

「・・・芽衣？ 誰と会話しているのです？ 私の側に控えるときは、私の言葉だけに耳を傾けなさい」

「え、本文を練つて・・・うはあ！ いえその、も、勿論です。『じゅじんさま！ ご主人様の事しか考えていませんよ！ だつてノルディ様はお顔はそりや女神様みたいですけど、ひょろひょろしてないですし、実は鍛えていらつしゃるから、胸板とか実はすごいんですー！」

「・・・芽衣・・・」

ほんのり赤くなつたノルディが、そつと抱き寄せるも、娘はわたわたしながら己が墓穴を掘つたことに気付かないでいる。

傍目から見れば、恋人たちの抱擁だが。

実にいい雰囲気なのだが。

当の娘はと言えば、あたまのなかで妄想がぐるぐるしていた。そりやもう、ぴーがぴーしてぴぴぴぴなんだ。

（ばれたら困る！ 困りますつて！ じ、じつはこつそりとノルディ様モデルの鬼畜美形攻め・ラグエルさんモデルの強気俺様受けで小冊子作つてましたーなんてバレたら・・・）

「ひよえ・・・」

・・・娘の顔が一気に青く、なつた。

「・・・芽衣？」

「え、ええと。はい！ 誠心誠意、『じ奉仕させていただきます！ 何なりとお申し付けくださいませ、『ご主人様！』」

「・・・『じ奉仕・・・意味・・・分かつて・・・いま、せんね』やや、言葉につまり、目の端を仄かに染めて、流し見るそのお姿。

麗しいです！ 麗しいです、ノルディ様！ どんな淑女も敵いま

せんよ！

ああああ、モー、惜しいな！ なんで今こにいるのがわたしなんだ？ なんで色男が一人もいないんだ！？

肉弾戦を極彩色で飾れる強面のまっちょな兄さんか、ノルディ様を押し倒せる優美な美形がいれば・・・！ ノルディ様と攻めの奪い合い・・・もといマウントポジションの取り合いが見れたのに！ はだける胸板！ 飛び散る汗！ 引き倒されまいと歯を食いしばつて・・・やがて訪れる快感に抗うその姿・・・ああ、もだえる！

やつぱり、男子たるもの肉弾戦よね

でもまっちょ受けつて、好みが分かれるからなー・・・嗜好を掘り起こしそうと試しに今書いてるけど、やつぱりこには見田麗しい少年が必要かなー？ ううん、悩むなー。

レースとフリルをふんだんに使った白いドレスシャツを着た美少年のかな、やつぱし。

でもさー何でか、ご主人様の側近つて、既婚者さんか爺さましかいないんだよねー。食べじろ男子はいないのか？

周りを見渡すも、ぎゅっとさき抱っこされたわたしを暖かい目で見つめる爺さまと（孫か？わたしは孫か？）、微笑ましいのかどうなのか、珍獸見る目でわたしを見つめるおっさんしかいません。必然的に貴重極まりない、天然記念物クラスのノルディ様の麗しの微笑を見れたのは、わたしとこの部屋にいる極少数の側近さんだけ。

ああ、もつたいない。

わたしなんかにそんな貴重な表情えがお見せてる場合じやないですよー？ その笑顔を振りまいたら、落ちない男はいないと思つんだけどな。

「ええと、ノルディ様の為にがんばります！ お疲れでしたら、子羊昇天間違いなしの魅惑のボディマッサージを、ご主人様に行使

いたしますよ?』

子羊命名の、ゴールドフィンガーをわきわきさせて、頭上の女神を見上げれば、長い睫を伏せさせて苦笑するノルディ様と田が合つた。

・・・落人であるわたくし、岸 芽衣の、命の恩人で衣食住の神である白銀のノルディ様。

ただ麗しいだけじゃなく、視野が広く、明晰で、ひとりの取りこぼしもないように治められた羊国はとても平和だ。

信頼されてる羊族の長さまで、預かっている領土の御領主様で、山間部に生息する羊や山羊族の統治者で。

たおやかな外見からは、およそ考えられない位の仕事量をこなすその姿は、尊敬に値する。

お役に立ちたいの。

今もそう。

娯楽を履き違えているかもしけないけれど、活版印刷技術の推進は間違つてないと思うのね。

小冊子を作つて情報を発信するつてことは良いことだと思つの。ぼーいざらぶに限らず、童話や伝承を残すにはいい手だと思うのね。・・・何事も、挑戦あるべし。

そうよ。かの芥川龍之介先生も嘗てこいつおっしゃった。

『人間を人間たらしめるものは、常に生活の過剰である』と。

『僕らは人間たる尊厳の為に、生活の過剰を作らなければならぬと。

『過剰を、大いなる花束に仕上げねばならぬ』と。

・・・いや、過剰すぎるか、ぱーいすりふは・・・。つづむ。

などと考えていたら、頭の上でくすっと笑つたご主人様が囁いた。

「・・・では、いつもの時間に飲み物を運んでくれますか？ その時にその魅惑のマッサージをお願いしますね」

「はい。でもノルディ様・・・するは無しですかね！？」

あはは、と笑うご主人様を見上げて今度こそ勝利するんだ、と心中に誓つたわたしだった。

飲み物運ぶのはいつもの仕事です。

毎晩、寝る前にノルディ様に飲み物デリバリするんだけど・・・。それは簡単そうでいて、実はものすごい難しいミッションだったりする。・・・個人的には。

「・・・う、うう。するしないって約束したのに・・・」

ノックして、応えがあつたので、ドアを開けました。

手に持つたトレイを落とさなかつたわたしを褒めて！ ねえ、褒めて！

「・・・する？ マッサージしてもらいたいからこの姿なのだが・・・」

「は・・・反則です・・・」

鼻血出るかと思いましたよ。

巨大なベッドに横たわる、白銀の牡羊様の絢爛豪華なお誘いのボーズ！

目ン玉つぶされるかと思いました！

寝そべつてわたししゃ人畜無害な、愛玩動物なんですと言わんばか

りの流し田に！

ついふらふらと近寄つて。

おつきなベッドによじ登つて、夢見心地で擦り寄つてしまいそうな自分を、誰か止めてクダサイ。

「芽衣……マッサージしてくれるんでしょう?」

「……は」

ぐりんと小首を傾げた、美貌の牡羊サマの、輝かんばかりの「かまって」「ペームが！」うああ！

負けました。

負けましたよ！

トレイをサイドテーブルに置いて。

どきがむねむねの状態で、そつと手を伸ばす……。

もふつつ！

もふつて、ふわつて……！

うはあああ！

もふもふの毛皮に入れて、暖かな温もりに頬を緩ませた。（なでなでなでなでなでなで）

言葉は要らないの。自分の鼻息は荒いけど何も言わないし言わないわ。（なでなでなで）

ああ、暖かなこの温もりにひとたび触れたら、脳神経が焼け落ちてしまいの……！（なでなでなでなでなでなで）

田を細めて、気持ちよさそうに顎なんかあげられて、「めい」な

んて名を呼ばれちゃつたら……（なでなでもふもふなでなでもふもふなでなでもふもふ）

至福。

恍惚。

至高。

「あ、はあああん……そこ……」

言葉の意味を正しく噛み締めて、昇天しちゃつたわ……。

言わないで、分かつてるから。

そのとき自分がどれほどしまりのない顔をしているのか、恥ずかしくつて誰にも見せられない！

至福の顔で、ご主人様を撫で繰り回しているなんて、ほかの羊さんには言える筈ないんだからあ！

・・・で、気がつくと逞しい胸板に抱きこまれて、はたと我にかえるのを、毎日毎晩繰り返しましたのよね。いい加減学習しようよ、芽衣。このハートラップ悔れないのよ・・・！

「あ、ああああ！ ず、ずるい……」

もふもふの羊さんがいつの間にか、人型なんです。

もふもふがあ！ と涙目で見上げると

「ずるいのは、どちらですか・・・」

ため息つくよに呟いたご主人様が、苦しそうな顔でわたしを見つめた。顔が近いですー。

「まったく自分の変化した姿に妬く日が来るなんて、思つてもいませんでした」

いい加減、わたしの腕に慣れなさい。それとも毛皮がなくとも安

眠できるよつにしてあげましょうか？

すいと尊顔が近づいて、吐息が唇にかかつた。

無言でぎゅううと抱きこまれて、頭も身体も足も絡め取られた。胸とか、腰とか、隙間のないほど重なつて、じきじきしたのは内緒です。

ご主人様の心臓の音を耳にして、安心して力が抜けたのはもっと内緒なんです。

「・・・動けないです。ご主人様」

「今日はここで休みなさい。ひつじになつてあげますから・・・

芽衣・・・」

そして羊に包まつて眠るんだ。

泣きたいほど安心感に包まつて眠れるのは、なんて幸せなことだらう。

・・・じ主人様の侍女さんは沢山いる。それこそ知らない羊さんも沢山いる。

でもお部屋に夕刻、飲み物を持つていくのはわたしだけだ。

以前一回か二回顔を合わせただけの娘さんに、面と向かつてその役目を譲つて欲しいと言われたこともある。

でもメリーサンが、言い返してたつけ。

「貴女が持つて行つても、長さまは決して喜ばないわ」

編み物仲間の娘さんも、みんな口をそろえて庇ってくれた。

「長さまは、今までこんなこと、めえちゃん以外に頼んだこと無

かつたのよ？」

「・・・ねえ、どうしてかなあ。一晩牡羊姿とは言え、『ご主人様に拘束されたまま眠りにつくのは胸が苦しいんだ。

・・・何でか最近、胸がしきりにじくじくと痛むんだよ。変なの。

「・・・それは、めえちゃんが長さまで言わなきやダメよ」とメリーサンや娘羊さんは笑つ。

『ご主人様は治療法を知つてゐるのかな。

「めえちゃんだつて、分かつてゐるのよつ」

メリーサン、メリーサン。

みんなもにこにこ笑いながらわたしを見るけどさあ。『ご主人様にぎゅつてされると苦しいんだよつ。

「早く分かるといいね」

メリーサン、メリーサン。

自分で気付かないとやっぱ、ダメなのかなあ？

「お休み、芽衣。良い夢を」

「はい。お休みなさい、『ご主人様』

いつか分かるなら、今わからなくても仕方が無いかなあ。そう思いながら、大きな羊に擦り寄つて娘は眠りについた。

その娘の寝顔を見つめる牡羊の姿があった。

今日一番の書類を手にひって、白銀のノルティはまじまじと見つめた。

『企画書・めえちゃん発、小冊子の発行願い』

概要を読み進むにつれ、ノルティさんの眉間にしわがよつてきた。

芽衣が進めるものならば、許可はしたい。許可はしたいが……。

「なんですか、これ……」

初回の発行部数を考慮して、まわし読みを検討してこられた。主要施設にて閲覧できるように、とある。

が。

『男子禁制（特に長さ）』

これつてどうことなのだかうと、頭を捻るノルティ様の姿があつた。

羊の国からあなたの知らない世界（後編）

長さまが攻か受けかは」」想像にお任せ（？）
でもばれたら。
ばれたら・・・（がくがくふるふる）

羊の国から桜だより

拝啓。

はるか異世界にいらっしゃる、お父様、お母様、お元気ですか？

梅は咲きましたか？ 桜の花は如何ですか？ 桃の花はまだかかり。

連翹も、沈丁花も、つつじ、木蓮、雪柳も、先を競つて咲き誇つている頃でしょうね。

庭の水仙は咲いたかな？ 每年植えていたチューリップ、今年の色は何色かな？

一面の芝桜は、今年もきれいでしょうね。

山間のあの町は、雪解けを向かえ、春めく花の競演で、さぞや見頃でしょうね。

田を闊じると浮かびます。五感があの姿、あの香りを覚えています。

・・・大丈夫まだ覚えてる。

花見山の見事さは、言葉には出来ない。

鶴ヶ城の千本桜は、そこにいるだけで時代を超えてタイムスリップしたみたい。

夜ノ森の桜は、文字通り夜風に吹かれて行くべきだと思つ。

田村市の夏井川の千本桜はまるで夢のよつ。

会津の石部桜も、三春の滝桜も、美里の伊佐須美神社の薄墨桜も、たつた一本の桜にあれほどの感動をもらえる。

信夫山の紅しだれだつて時間を忘れて見入つてしまつんだ。

南湖公園、釈迦堂川、名だたる桜の名所には不思議な魔法がかかつてゐみたいだつたね。

・・・もつと、あの景色を噛み締めればよかつた。

何氣ない日々の積み重ねが、いつも当たり前にそこにあるものが、離れてみると、こんなにもいとおしくなるなんて。

くすんと鼻を鳴らしたら、『両親様のかわりに』主人様が飛んできて慰めてくれるから、心配しないでね、芽衣はひとりじゃないよ。物申すならひとつだけ。

『主人様、なんで、もふもふじやないの・・・？

』ついた胸板が頬に当たつて、心底、悔しいです。

「長老様。お山にピンクの花をつける木はありませんか？」

「嫁御、ぴ、ピンクの花・・・？」

「はい。嫁じやなくて芽衣です。ピンクの花です。五片の花びらか、もしくは八重なんですけど、色も白っぽいものから、濃い紅色までさまざまなんです」

むう、耄碌しちゃだめよ、爺様ー。誰が誰の嫁なのさ。孫かと思えば娘と言われ、さらに嫁かー・・・やれやれ、末期だな・・・。遠いところを見つめていたら、爺様ズが顔を突き合わせ、あーでもない、こーでもないと論争を始めた。

「ピンク。ピンクのう・・・」

「そんな花をつける木があつたかのう」

「りんごは白いか。それにまだじやし」

くりんと小首を傾げる爺様ズ。

これはこれで癒し効果が無いとも言えない・・・。限定羊型でお願いしますけどね！

「・・・のう、あれじやないか。にがーい実しかならない、花だけの」

「ああ、あれはたしかにピンクじやあ」

「ああ、あの役立たずかあ」

「・・・花は見事だが、その後うまい実もつけないし、いろいろと用途に困る木なんじゃよー」

「・・・役立たず・・・うん（がつくし）たぶんそれです・・・」

さくらんぼは、改良品種だからなー。見つけても改良しないと無理そだー。

用途ね、用途・・・桜の花や葉っぱは塩漬けにして、桜餅の原料かな。後はスマートチップの材料か・・・。

そんなことを考えながら、爺様に教えられたとおりの道を通り、春先の山の中で子羊たちと、よつやく第一山桜を発見しました！

遠田でも空に溶け込む桜色が見えます。

「みんな、あの桜色の雲のところまで頑張って歩こうねー。さつとお弁当美味しくなるよー」

そう発破をかけて子羊たちと歩いた。

桜の素晴らしい景色を、じつちのみんなにも伝えたいと思って、始めた遠足だけど・・・この木、爺様ズに聞いてた以上にすこいや・・・。

到着そつそつ、ぱつかりと口を開けて見上げてしまった、それ。

「「「「「「わあわあわあ」」」」」

子羊たちも絶句した。

天から降るピンクの星のようだ。さわさわと音を立てて揺れる桜の古木。八重桜のしかも枝垂れは見事だった。

「めえちゃん、良いにおいするねー」

「かいだことない、においだねー」

「あのね、これが桜の香りなんだよ」

「わくらー？」

「わくつやー？」

「わくらー？」

「おし。ではみんな、この木の根元に座りましょー。」

シーツを敷いて、その上にあたたかいラグを敷いた。それから背

負つたリュックを下ろした。

わたしの周りに子羊たちが腰掛ける。

おののおの背負つたリュックからお弁当を出していた。

わたしはと言えば、朝がまどで焼いたパンに、春の野菜サラダに、果物沢山。

子羊たちが道々摘んだ、ヨモギやタンポポ、スミレやギシギシ、葛の新芽に、ウコギの新芽なんかも並んでいる。道草。立派なおやつだ。

羊のお乳で作った、ちょっとびりしょっぱいチーズを配り、羊さんのミルクをみんなのカップに注いで準備完了。乾杯。

もしゃもしゃと食べ始める子羊を見て癒されて、桜を見上げて癒される。

木漏れ日が、きれいで、涙が出そうになる。

「・・・石部の桜か、滝桜みたいだな・・・見事だわー・・・」
なのに、爺様方には不評なお花だなんて。

基本実のなる木が珍重されるのはわかるけど、実がならなくて使い道がないから厄介者扱いるのが悔しかった。

だつて桜は日本人の花だ。

「実がならないくらい何よー。滝桜なんて地域経済に貢献して観光の底上げしてるのにー・・・」

ううむ、と小首を傾げる。

「花見の習慣がないから・・・だな。きっと・・・」

この世界では、花を愛する習慣が無い。
きれいな花はきれいだね、で終わるのだ。
やはり、ここはひとつ一肌脱がねば！

「おなか、いっぱい」

「おなかぽむぽむー」

「ぱむぱむー」

ぐぐつと氣合を入れていたら、子羊たちの氣の抜けまくった声に現実に引き戻された。

おとと、忘れるところだつた。

「そりだ、今日は、デザートも持つてきたのよね」

「「「「「わーいわーい、めえちゃんのでじゅーとひー。」「」「
ぱあつと明るい顔で手放しで喜ぶ子羊たち。周りをぴょいぴょい
飛び跳ねて、とても可愛い。」

彼らにいろいろ作ったものは、好評なんだ。

・・・お山の天辺で摘んだ、香り草の次にだけどね。

「ふふん。香り草には叶わないかも知れないけど、これだつてす
ごく美味しいよー」

その彼らの田の前に、わたしあるものを取り出した。

四角い箱の中にみつちり入った、黒いもの、黄色いもの、つやつ
やした透き通つたもの。

小豆もどきで作ったあんこ。大豆もどきで作ったきなこ。しょう
ゆもどきで作ったみたらしたれ。

本当は黒コマも入れたかつたんだけど、コマつてものすこい高級
品らしくて・・・くるみもどきも探したけど見当たらなかつたの
で、今日はこの三品。

あんこ、あな粉、みたらしを迎えるのは、色艶も良い緑の草だん
ごだ！

結構かさばつたけど、やつぱり、これが無いとお花見は始まらない
いよね！

「・・・なに、これ。めえちゃん・・・」

「おだんごよー。お花見団子つて言つのー。」

「おだんご」

「甘くて美味しいよ。ほら」

む。 て、一木一束に一目分の口に木が 怪石に叩き自然喪失

見慣れないもので、子羊たちの好奇心は果敢に挑戦を叫んだようだ。わたしを真似て、ひとり（いつびき？）が楊枝でひとつをつまみ上げ、口に入れた。

其の上其の上其の上。 . . . いふ。

卷之三

じ」と見紹介すると、真剣な子羊の顔には、色は染まらない。ああ、と花が開いたように明るくなつた。

・・・
ふ。勝つた。

身振り手振りで如何に美味しいかを伝授しようと子羊約一名は頑張つたが、その前にみんながお団子に殺到した。

1
?

……（反応するのはやはり草か……）うん。モモギいれた。

卷之三

不思議不思議と子羊たちが群がつてくる。

「の周りにあんこついてたり きな粉ついてたり 果てはみたら
しのたれで貴重なもこもこが・・・のおおおおおおつ！！！

ても、慌てない。

葉衣はベヒー・シッターを極めるのです。

ぬひしたタオルで、髪を拭いて、おにぎりをふき取つてやる。

うん。いい、いい。

茹でてすり潰して粉に混ぜて、蒸して搗いたの。また作

「ふううううん。むずかしいんだねー。でも美味しいの嬉しいの。
また作つてねー?」

まさにその時閃いたの！

「おおお、お花見団子……盲点だつた一つ……」「

「…………めえひやん…………？」

۱۰۰

小首傾ける惣殺ホースの子羊たちに、あやべく鼻血ふきそうになつたよ・・・。

「おぐうつ！・・・だ・・・だいじょぶ、大丈夫・・・（親指ぐ
なんて言愛らしいの キミタチ・・・！

三

はあはあしながら鼻血をふき取るわたしつてやつぱり変態なのよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・で」

白銀のノルディは、優美な眉を痛みをこじらせるように寄せた。頭痛が、する。

氣のせいではあるまい。

「ええとですね。その後、速攻で帰つて、爺様・・・長老様にお

伺いを立てて一、で、長さまの許可が必要なんだといわれまして

「・・・・・（またあのじじいども）」

白銀のノルディはそっと目をそらした。

・・・本音であれば逸らしたくはない。

誰にも見せないように部屋の鍵は速攻でかけた。芽衣は気付かなかつたようだ。無防備ぶりを喜ぶべきか、しかりつけるべきか。

だが、邪魔者はいないのは明白だ。おそらく爺どもが壁に耳を押し付けて中を伺っているだろうが、邪魔はしないだろう。

だが、その手に乗つてたまるものか。芽衣の貞操は守る。守るべきだ。守られるべきだらう。・・・そうだな、自分。

・・・だが、刺激が強すぎると・・・。

何考えてるんだあのじじいども。

「『』主人様ー？」

芽衣はいわゆるベビードール型のメイド服に身を包んで、小首を傾げてわたしを見上げてきた。

その濡れて艶めいた赤い唇に、ちらり覗く可愛い舌先に。大慌てで顔を背けた。

くうつ！

芽衣、君のそれは挑発か！？

挑む気なら受けて勃つ。いやいや、勃つてどうするー！

・・・落ち着け、おちつけ、俺。

これは陰謀だ。爺どもの言いなりになつて、愛しい芽衣に襲い掛かつてどうする・・・。

「その。それは・・・いつもの服ではないでしょ？」

搾り出した言葉に、きょとん。として、芽衣は両手を横に広げた。

淡い桃色の薄い生地で作られた、一見ふんわりしたミニ丈ドレス。あの布は、生まれたばかりの子羊の、細い毛で織られた、数の少ない貴重な布だ。一見すると縄と見紛つが、列記とした羊毛布だった。

そんな貴重な反物で、なんて淫靡なものを作ったんだ！

・・・あとで金一封だな。

いや、いや。じほん。

「・・・ええと、『羊族伝統衣装で、春先のこのシーズンにはこれを着て、夕刻長さまのところに行く慣わし』だと・・・」

「ありません！ そんな慣わしありませんから！ どんな罰ゲームですか！」

「え。・・・罰ゲームなんですか？ ジヤ、わたしの提案はやつぱり認められないということなんですね？」

衝撃うけて落ち込む芽衣に、もつと慌ててしまった。

「あ、いや、違います！ （どちらかと言えば罰を受けているのはわたしのような気がします） それにそのドレス、似合つてますよ！ （そのまま押し倒したいくらいに） ・・・じほん。ああ、芽衣、提案つてどんな提案なんですか？」

しおれた芽衣を見ていたくないから、強引に話を摩り替えた。顔を上げてくれないか。

まっすぐ見つめるその瞳に、わたしを映して欲しいんだ。

「・・・あの、お花見です。向こうの世界では春のこの時期、満開の桜の下でお弁当食べたり、お酒を酌み交わしたりするんです。馬鹿騒ぎをする人もいますけど、基本、みんな秩序もつて、静かに桜を愛でるんです。とてもきれいなんですよ？」

そう呟く咲衣を見て、ピンクの花の精霊なのは、そのままの感じやないかと思つた。

そして、合点がいった。

「その台詞そつくりそのまま長老たちに言いましたね・・・？」
大きく溜息をついた。

「え、はい。言いました」

「・・・・・・・・・・・・納得しました」
だから「桜」のような、薄いピンクのひらひらなんですね・・・。
あのくそじじい。
実にナイスじゃないか。

「・・・良いでしょう。お花見を許可します。しかしその衣装は、
わたしの前以外では着てはいけませんよ？」

しつかり釘を刺しておかなければね。

じじいども、こんな淫靡なものを着せて、あとで田にモノ見せて
やる。

・・・つまい香り草で良いかな・・・。

「あ、はい。長老様たちにも言われています。これってご主人様の
前でだけ着る物なんですって。約束を破ると大変な目にあうって言
われました。でもご主人様、この服、用途不明な切り込みや、開い
てちゃいけないはずの所に穴開いてたりするんで、ヘンなんです・・・
・丈も短いし・・・」

屈めないんで仕事にならないんです。

でも、なんでこんなヘンなとこ切れ込み入ってるんでしょう？

製造元に抗議しなきゃいけませんかね？

「いえ・・・たぶん、そつぱいのものなんでしょう・・・（田を逸らし）」

・・・淫靡な恋人同士の為のコスチュームなんですから・・・。

本来の使用方法を知つたら、芽衣はどんな反応をするだろう？

「・・・でも芽衣、一人だけの時はまたそれを着てくださいね？」

長老たちが君の為に準備したものだからね」

「そ、そうですね！ 感謝します！」

（いや、感謝はしちゃダメだ）

頭が痛いのは、きっと、気のせいじゃない。

ともあれ。

芽衣率いる「第一回羊族お花見大会」はこいつして開催された。

あんこと、きな粉とみたらし団子は羊族に好評だった。

まさに、花より団子。

その年、山桜の元へ続く山道が整備され、翌年からは各国の観光客も来る、田玉スポットとなる。

半の国から桜だより（後書き）

・・・茶の葉の茶店にて、例の小冊子がおいてあつたじして・・・。
順調に信者獲得中。

羊の国から腐女子のススメ

誰にだつてハジメテの衝撃つてのがあるわよね。

それが如何に衝撃的で、魂搖さぶっちゃうかで、その後の進退が
変わっちゃうくらいの。

・・・わたしのハジメテの衝撃は、十一の時だつたわ。

なじみの本屋さんでふと手に取つた漫画本。表紙はいたつてノーマルな男女カップルだつた。・・・よつに見えただけなんだけどね・・。はあ。

でもね、読み進めるにつになんかへんだなーつて思つたのよ。
今思えば、そこでやめときや良かつたのよねー。

でも、好奇心つて奴は一度起きたと解決するまでおさまらないで
しじう?

あの時のわたしもそつと知らずに踏み込んでいったのよね。

未知の世界へ!

あるシーンにたどり着いたとき、可愛くて口の悪い女の子だと思
つてた子が、男の子だと悟つたわ。

あれがイワコル、青天の霹靂だつたのね・・。

そのあとは、?の増産よ。

あれ?

なんで?

どーして？ よ。

何で、男同士で見詰め合ひつて、頬染めあつて、抱き合ひて口付けしてゐる・・・？

硬直した指は、脳が指令する行動を忠実に行つたわ。
本、閉じたわ。

でも、そのうちフラッショバックするわけよ。眠つたとき、起きたとき、勉強の合間に時折ふつと降りてくるの。あの感覺。淫靡な、背徳感。

イケナイ事をしている自覚はあつたわ。
親に隠れてあんな本に手を出したら・・・戻れなくなると嘆いたの
も知つていた。

でも、あの、胸をざきざかせる高揚感。あの味をもつて一度、と思つてまた本屋さんへ行つたの。

今思えば、世はまさしく、ぼーいすり、ジャンルの確立を祝福し、謳いあげていた。

淫靡で華美で、どこかストイックな陰影を伴つ雑誌が、といひませ
ましと置かれていたの！

まさに天国！

一回、転がり落ちると、どつかにぶつかって止まるまで、誰にも止められないのよね・・・。

未知の世界が諸手を広げて歓迎してくれたわ！

でもそこで、わたしは奥の深さを知ったのです・・・。

ぱーいすらぶジャンル、侮りがたし・・・！

オーソドックスな恋愛モノ、リーマンもの、教師モノ、同級生モノ、やくざモノ。

ハードを追求する、監禁もの、緊縛もの、鬼畜もの。

マニアックさを謳うもの、ハーレクインもの、ファンタジーもの、歴史もの、転生もの、童話口調のもの・・・分類しだすと切がない。

しかもだ！

漫画でビジュアルに魅せるモノがあるかと思えば、文章一本に絞り込んだ読み応えのあるものまで存在するから大変だ！

・・・通つたわ。

通い続けて、本屋さんじゃダメなんだと気がついた。サークル活動の中で、同人誌を発行している方が多かったの。

でもね、同人誌って普通の本屋さんじゃ売つてないのよ。

同人誌はすごかつた！ なんと言つか、濃い？

プロも顔負けの精密な描写！

絵は事細かく細部まで書き込まれている。そう・・・せいぶまで！

そりや、もう髪の一筋まで再現されてる代物だ。

波打つ胸板に流れる一筋の汗や、顎を伝う汗や、にっこり笑った男性が握りしめてる男性の（！）象徴に浮き出した血管の一筋や、ちろりと出された舌先から滴る露までが、綿密に描き込まれていた

の・・・！

・・・これって、汗かしい。

・・・それともなんか違う汁かしい。

同じ「さんすい」なのになんなの、この単語の持つ、度合いの違
い・・・！

いけない。

この続きを見てはいけない気がする。

でもでも、気になる・・・。それが腐女子。

恐る恐る、むしろ怖いもの見たさで果敢に続きを読み進み、攻め
男子と受け男子の痴態を田を田のようにして見ていった。

青くなり赤くなり、白くなつては赤くなり、そして語つた。

おやるべし、同人誌！ 見習おう腐女子の絆！

男同士の口付けだけでうろたえていた青いわたしは過去の産物。

今じやすつかり染め上がつてる。

「ううん、ここはやつぱり、古々しげに睨み付けて、そのつち淫
靡な快楽に屈して吐息を漏らす、つてのが良いかも・・・」

「うちの構図の方が、いいよね？ と誰にともなく呟いて、芽衣
は描きあがつた下書きの紙を持ち上げた。

「ママ割りも台詞配置もばっちりの漫画の原稿だ。

「熊の左手は、ノルディ様の着衣の中にこっ、潜ませて……うん？　こっ、あれ？」

仕方なく鏡の前で全身を映し出して見た。

後ろから羽交い絞めにするんだから、こっ、腕が回せれて……

ああ、肩口から抱き込む方が良いかなー？

鏡の前で自分を抱きしめるように腕を回す娘の後ろで、ノックの後顔をだしたピンクの毛並みの娘羊が、その場で立ち廻っていた。

「あれれ？　めりーさん？」

めりーさん、めりーさん、もしもーし？

自分を自分で抱きしめている間抜けなポーズのまま、芽衣がメリーサンを振り返った。

メリーさんは固まつたままだ。

どしたの？　と小首を傾げる黒髪の娘さんと、それはこっちの台詞だと言わんばかりのピンクの娘羊が肩を落とした。

「……最近夜遅くまで仕事をしているのだから、様子を見てやつて欲しいと長さまが、仰るから……でも、楽しそうだね、めえちゃん……」

「えへへ。お仕事じゃないの。趣味と言つか、娯楽と言つか……」

「真っ赤になつてすまなそうに謝る娘は可愛らしく。

悪気がないのはわかるのだが、でも長さまはこの娘がナーラシティタノカが気になるのだ。

きつと扉の向こうで聞き耳を立てているに違いない。

そう思いながら、メリーさんは目の前の娘に向き直つた。

「……解つてるわ。めえちゃん監修の娯楽本の作成でしょう？　となりのリリエルが続きはまだかつて騒いでいたものね」分かっているからなお痛い。

長さまに言いたいが言えないこのジレンマ。

声を大にして言いたい。

この娘はねー、長さの裸体を描いたらや、男同士の劣情に焦点を当てた、モノスゴイモンを描いているんですよーって。

・・・言えないけどね・・・。

半ば諦めきった表情で、娘羊さんは芽衣を見た。

対する芽衣は上機嫌だ。筆の進み具合が良いらしく。（頭の痛いことにならへよ、めりーさん）

「 そりなの。 続きがんばって描いているけど、でも完成度は高い方が良いじゃない？」

活版印刷はもっぱら童話や昔話が中心で、口伝でつたえられたものを形に残すことから始められた。

そつちが最優先だから、今、ぼーいすらぶ分野はお休みだ。ちまちまと木片を彫って印刷するには時間がかかりすぎる。

だから今わたしが描いている物は、文章ではなく、漫画だった。炭の粉を粘土に混ぜて、固めた墨の棒で、線を引き絵を描いていく。水墨画みたいなものだ。

これなら一冊、十日位かければできるし、読むのに時間はかかるないから、すぐに回し読みが出来る。

回を重ねてなんともう五冊目に突入だ。

毎回ノルディ様似の美形が困難な目にあつてているけど、おおむね反応は良好。

みんなやつぱり美形受けが好きなのねー・・・。

でも途中まで仕上がつた漫画を見ていたメリーさんが、眉をしかめて呟いた。

「・・・きれいなだけなら、女人の方が良いに決まっていますわ。
柔らかいし、抱き心地だつて良いはず」

「めりーさん？」

「近寄りがたいほど綺麗で、尊敬できて、心酔しきつてゐる、存在感のある男性が、その崇拜ゆえに、崇拜している相手に押し倒される！ つてところに禁斷の香りを覚えますのよ。攻略の難しい難攻不落の相手に挑む男の心意氣！ 男足の者そつでなくつちや…」

「めりーさんも、そう思つ？？」

「当たり前ですわよ！ 熊と女神の肉弾戦は、ぜひとも女神に勝利して欲しいですわ！」

だつて私たちの長さまが、黙つてあんな熊に押し倒されるとお思いで？

「「否…」」

「長さまは、鬼畜ですわ！ 押し倒して嫣然と蠱惑的に微笑んでもらわなければ！ 大体あの熊に長さまを御せる力量などございません！」

嫁御の尻に敷かれて鼻の下を伸ばしているそつですもの…

ラグエルさんのお嫁さんは、山羊族稀代の姐御と呼ばれる女丈夫らしい・・・。

猛々しさは男顔負け。女子の憧れの的。

「ふん、ラグエル」ときが触れてよいお方ではありませんのよ、おねえさまは！ きっと泣きついたに違いありませんわ！ お姉さんは年下のものを無碍に扱つることもない、凜々しいお方なのに・・・

「

メリーサンのお手本と崇められた女性は、どつも、ラグエルさんより年上みたいだ。

「・・・あの髭は、お姉さまに少しでも近づきたい年下の男の子の気合なのか・・・」

「うと知つたら、今度は、あれだ。

「下克上つて、響きが好き・・・」

熊よ、チャレンジャーとして認めてやう。 (えらべり)
未踏の大地に挑む挑戦者として、讃える本を書かなきや・・・!
が寄つていた。

「めえちゃん、この、ねくたいってなあに?」

おおう、ネクタイ!
ないもんね、ネクタイ!

「ネクタイはねー、リーマン・・・サラリーマンつていう職種の方が使用する、仕事着の決めアイテムなんです! もう、もう、最強のアイテムなんですよ! 縛つてよし! 目隠してよし! さらに上級者になると、素肌にワイヤーシャツ、解けかかっただネクタイのみという、無敵のお色気をかもし出したり、果ては勃つてゐる一物の根元を縛つてイケナクさせる拷問アイテムに仕立てたりという腐女子的最強アイテムのひとつで・・・」

頬を真っ赤に染め上げながら、説明を始めた黒髪も麗しい娘。

その状況を想像したのか、やがて両手で頬を押さえると、メリ一さんの目の前で嬉しそうにくねくねし出した。

ばら色のほっぺに、艶めいた黒髪が色を添える。

だが、その娘の紡ぎだした言葉の羅列に、メリ一さんが血相を変えた。

「……めえちゃん向こうに恋人いた？」

「へ？」

「見たことあるの？ そ、それとも、し・・・したことがあるの？ ピンクの娘羊の頭の中はすわ一大事！ でいっぱいだった。

どうしよう！ 恋人がいるなんて言われたら！

長さまになんて『報告をすればいいのだろう！？ だいたい漫画を見せてもらつてから、付きまとつていたこの疑惑。 だつてどこの世界に、処女が処女のままで、こんな大胆なものを描けるのか！

うふそなめえちゃんに、まさかの恋人疑惑浮上！？

長さまが、心痛で死んでしまつわ！

「冗談じやないつ！！！」

「へ？ へ・・・な、にゃにゃにゃ！ ないです！ 見たこともしたこともないです！」

ピンクの毛玉が逆立つて、勢いそのままに迫られた娘は、言葉に含まれたものに慌てて手を振り始めた。顔が、赤い。

「うそおっしゃいつ！ ここ！ この絵！ しかもここ！ この、うにゃにゃの詳しい描写と言ひ、形状と言ひ、見たかもしくは味わつたことがあるのか明白！」

「ないつて！ なにその断定口調！ しかも、味わつひいいいいつ！ ち、ちがう！ その、その」

慌てた挙句そんなことを口走った芽衣だが、間違いではない。 田を白黒させながら、詰め寄るメリータンを見上げた。

「わたしは未体験です！ でもそこを補つて余りある、好奇心で掘り下げてきたの！ 未知のゾーンは、想像の賜物なんですようつ！！！ あとは、先人の描いた代物を舐めるように見込んだ結果と、

先輩の仰つた「まつたけに思いを馳せよ」とこつちを胸に抱えていた次第で！」

「…………まつたけ…………？」

それって、なに。

「くくくくくと頷く娘の頬は、恥じらいに真っ赤に染まっていた。もじもじもじと囁をそらす。

「ええと、ええとね、は……恥ずかしながらこの岸、芽衣。恋人いな『暦』年齢でして。で、まつたけってね、向こうの世界の高級食材で、あるときお母さんが清水の舞台から飛び降りる気合で買った人生初の国産マツタケを前に、先輩のお言葉を思い出したのです……男の象徴はマツタケよ~ってのを……で、珍味を前にデッサンしました。

そりゃーもー、いろんな角度から。そしたら、その肉感的なところとか、肉感的なところとか、隆盛なところとか、質量的にも腐女子仲間に絶賛されて……ほ、ほめられて、のせられて……」

精魂込めて描きました！

男性の象徴を！

「…………めえちゃん…………想像でここまで描[写]を？」

いつも、あっぱれ。

「…………え、えへ」（至極嬉しそうな笑顔）

「…………（恥らつ場所がちがつー）…………つん。まあ、わ

かつたわ……」

がつくつと力を落としたメリータンの姿があつた。

でも良かつたのか、これで。良かつたんだろうな、これで。これで初体験済んでますなんて暴露されたら、いかな長さまだって立ち

直れるはずがない……。

なんて考えていたメリーサンを尻目に、芽衣は嬉しそうに絵を指し示していた。

「えへへ、でもね、これいいでしょー？ 男の人と付き合つたことがない子でも、これでシミコレーションすれば、恐怖半減！」

「……それは、確かに。でも本当に気持ちよくなれるのかしら。

・

「え、なれますよー！ きつとね！」

悶えつつ頬を染める少女ふたり。

「・・・くううううう、一回！ 一回で良いからご主人様を田隠して、はだかにしてみたいなあああ、抗うご主人様を押さえつけてー、もろ肌脱がすより、かた肌をこう、さらけ出させてさー」

わたしがそう言いつつ、右肩を出したもんだから、メリーサンが慌ててしまった。

「めめめ、めえちゃんつ！ はしたないわよ！」

「えええ、私なんて別に、ご主人様の色気に比べたら！ 花魁と下女くらいの格差が！」

「おいらんの意味もわかんないな・・・。でもめえちゃん、素肌を出しちゃいけません！ 毛皮がないんだから、そんな無防備に肌をさらけ出していると、勘違いしたばか者に襲われるよ！」

「わたしを襲う気力があるんなら、ぜひともご主人様を押し倒して欲しいです！」

隠れまっちょを押し倒せる男気に溢れたホモつていなかしら。目を皿のようにして探したけど、現実、さわやかまっちょまんは皆さん、妻帯者でした。

「押し倒す適任者がいないのが難点ですねえ・・・。押し倒せそうなさわやか元気系も、はかなげ美少年系も、強気子犬系も、気ま

ぐれ子猫系も、いるにはいるけど・・・いないんだもん・・・
ええ、年齢でアウト。

小さきものは本当に小さくて、その愛らしさを目にすると・・・
いくらわたしが鬼畜ボーアズラブ命つて言つても、気がとがめます。
情が移つたのよね。あの子達が鬼畜ご主人様に襲われる、と考えた
ら・・・無理！ 無理無理無理、無理いいつ！！！ そんな、可哀そ
うなことできるかああああ！

あの子達はわたしが守る！

ご主人様の毒牙にかけてたまるもんか！！！

・・・だからご主人様、安心して逞しい殿方に押し倒されて知ら
ない扉を開けてください！ あの子達の貞操の為に！

そんでもその一部始終をリポートするのです！

逞しい殿方に押し倒されて喜びに花開くだらうご主人様を、影か
ら見守りたいです！

あら、決して覗きではありませんよ？

処女ならぬ処男を散らす様を克明に書き記すためですから！ 後
学の友のために。

「アイテムとしては銀縁眼鏡代わりに、モノクル発見しましたし、
鬼畜男子に似合いそうな白衣も作りました。ネクタイだつて各種製
造完了してます！ 「めえちゃんつめえちゃんつ」 繩だつて、荒縄、
なめし皮、絹布、木綿と各種そろえました！」

なんか、メリーサンの声が間に入つたようですが、待て同志！

「・・・あとはご主人様を押し倒してくれる飛びきりたくましい
殿方を発見するのみです！」

「・・・殿方・・・？」

「はい！ ナイス組み合わせといえば、ラグエルさんだつたんです
が、あの方お嫁さんを迎えるそうですし、高砂や～ですので、省
きます！ でもでも、探せばきっと、この主人さまに似合いの隠れま
つちよか、はかなげ美青年と見せかけて、実は腹黒鬼畜系がいるは
ずだ、と、おもおもお・・・・・・め、めりーさん、明日の仕事は
何でしょお？」

夢見るよう明後日の方を見上げて語つていたわたしも、台風襲
来に気付いたので、さりげなさを装つて話を変えてみたりなんかし
ましたが・・・。

・・・遅かつた、よりです・・・。

開け放たれた扉には、優美な、あまりにも優美な羊族の若き長が
立っていました。

気のせいだよね、ブリザードが見える。

・・・・・。

ええと、前略。

はるか異世界におられるお父様、お母様。

・・・突然ですが、芽衣、ぴんちです。

羊の国から腐女子のススメ（後書き）

「冷気が一瞬で部屋を埋め尽くしてね、フリージングってこうこうことを言つたんだなあつて思つたの！白銀のノルディってあだ名は伊達じゃないんだね！ ものすごい冷気だつたよ、文字通り、氷の微笑！」

凍つてしまつて動けなくつて、あの青い瞳に見つめられてね、口元が開くたび、白い息が吐き出される感じがしてさ。実際温度何度下がつたのかなー？氷点下だつたと思つよ？雪女つて本当にいたんだねー・・・。

しみじみと呟いた。

「長さまは雪女じゃないけど・・・」

「それくらい迫力あつて、それくらい美人だつたつて事ー！」

羊の国かい、衣替え（前書き）

・・・作中変態チックな言葉がもろに炸裂しますが、別にそんな描写はないです・・・。

羊の国から、衣替え

拝啓。

はるか異世界に居ります、お父様、お母様。いかがお過ごしですか？

もう、初夏の頃ですね、新緑の緑の柔らかさが田に浮かびます。

田に田に暖かくなつて、過ごしやすい季節になりましたか？

そう、雪深い山間のあの町にだつて、もう初夏の気配は押し寄せてますでしょ？

冬物は仕舞い終わつたかしら？

もう、冬物着ている人はいませんよね？ ね？ ね？

ブ厚くて重い外套脱いで、お出かけしよ？ と、往年の飴玉隊の三人も言つてましたもんねえ・・・。

あんなもん、着てたらいくら初夏の心地良い風が吹いても、一向に気持ち良くなんかなりませんつて！

・・・やはり、これは大問題ですね・・・。

あ、なにが問題かって？ いえいえ、こいつのお話なのであります。

主に、わたくしの精神的苦痛を払拭するために必要な活動予告なの

ですよ！

田指せ、クールビズ！ 芽衣は快適なひつじライフを極めるために、
いつもそう努力します！

・・・ですから、『両親様は』心配なさらぬよ。

遠い異界の片隅で、切に願つております！

「むう、問題です。大問題です。美形腹黒鬼畜攻めは正義な位、大
問題なのです！」

「・・・わかつた。わかつたから、戻つてきなさい、芽衣」

今日は麗らかない天氣。

風薫る五月。生命は躍動をはじめ、伸びやかに己の人生を謳歌して
いた。それは、このひつじ族も。

この時期一番のイベントが開催されるこの月、ひつじ族に名を連ね
る者たちはどこかうきつきとしていた。

そう。

芽衣が訪れる前までは、私だってこの時期を心待ちにしていたもの

だ。

文字通り、血湧き、肉踊る、ひつじとして生まれたものなら感じるだろひ、生命の躍動を、種の神秘を実感できるこの珠玉の時期。

だが、いまや苦痛にしか感じられない。

あの胸躍らせる躍動の時が、苦行にしか感じられなくなってしまった。

・・・毛狩りシーズンの訪れ、だ。

大きな鋏を手に、きらきらした瞳で芽衣がノルディを見上げた。

・・・びつやら、刈る気満々のようだ。あれだけ、結構ですと言つたのに・・・。

羊族の上位種、白銀のノルディはびつじたもんかとため息をついた。

毛刈り。それは、羊にとって恍惚の時間・・・！

刈り手に身を預け、身を投げ出し、もうびつじでもしてえな状態でしなだれかかる。

分かる。分かるが、わたしだって羊だからなー！

あの開放感、あの清涼感は、金では買えない。

重いコートを脱ぎ捨て走る、あの開放感！……いや別に私たち羊族は露出狂ではない。だが、生命に刻み付けられた、羊の性が、

開放感を喜ぶ自分自身を抑えきれないのだ！

あの姿を、そのときの自分を、芽衣に見せたくない一心でひたすらに隠してきたこのイベント。

芽衣が館にやつてきてから、その存在を知られてはならんと宣言し、徹底して秘密裏に行ってきた毛刈りイベント。

・・・毛刈りの翌日、芽衣の「あれれ？ なんだか、今日はヤギさんがいっぱいですねー」に、そ知らぬ顔で相槌だつて打った。

な、の、に。

「あンの、ヽそじじい・・・」

白銀のノルデイは、ぎつぎつと歯軋りしながら恨み節を呟いた。

締め上げてやろうつか。

敬老精神も吹っ飛ぶ、爺の仕打ちに、ノルデイは心底怒っていた。あんなにあんなに、隠してきたのに・・・！ バラしやがつてくやじじー！

「なあにが、魅惑のつるつるタイムだ！・・・刈っちゃいけない際きわの際まで丸刈りにしてやろうか・・・」

・・・白銀のノルデイは、おせつかい爺たちにとうとう殺意を抱いた。

・・・まあ、そんなこんなで、愛しいあの子に、だらしなく寝そべ

り、恍惚の表情を浮かべる自分を見せたくないばかりに、今年の毛刈りをばっくれようと思つていたノルディだつたが……、芽衣のきらめきページに阻まれていた。

そつと皿を離す。

(ハーハーハーハーハーハー)

向きを変えてまた皿をそらす。

(ハーハーハーハーハーハー)

ああ・・・その期待に満ちた眼差しに、負けてしまつて、そんな自分がいるが、律するんだ、俺！

愛する芽衣にあんな姿を見られて良いのか、俺！

なんたつて。

毛刈りスタイルつてば、羊の姿は大の字万歳。

そり、大の字で、ば、ん、ぞ、い！

ノルディさんの背中をつめたい汗が通つていった。

しかも、しかもだ。むくむくのうちはまだ良い。

羊毛に阻まれ地肌はまるで見えやしないのだから。

だが、ひとたび、つるつと毛皮を剥かれたら。あら不思議、そつき

までここにいた羊つてヤギだったのね、と錯覚する」ともあるくらい貧相な姿になる。

しかも、羊毛を刈られてる間、無防備にも程があるって位、股か（ぴぴぴぴぴー！ レッドカードー！）まるだし。

ま、る、だ、し（？）なんだよ、諸君！

「・・・何が悲しくて愛しの芽衣との初めての共同作業が、剃毛つて・・・」

なんて高度な羞恥プレイ！

・・・しかも、剃られるのが自分。

「すきすき、ひひひひひひひひひんんんん、と落ち込んだ。

逆でしょう、普通！

妖しく微笑み、芽衣の羞恥を煽りつつ、大人の余裕で芽衣を大人にしてやるのは私の仕事のはずでしょう？

何で、隠しておいたイベントがオープンになっていて、私の担当が芽衣なんですか・・・陰謀？ 陰謀ですか、恨みますよ、長老・・・。

「（）主人様、毛刈りつて羊さんじやなきや、できませんよう？ だつてわたくし、落人ですから、刈れる様な毛皮姿になれません」

「・・・ええ・・・そう・・・そうですね・・・」

なんだか、ノルディは男の純情を投げ捨てたくなつた。

「えつと、で・・・では、参ります。『ご主人様、痛かつたら左手上げてくださいね?』

どこの歯医者と自分に突つ込みいれてみたが、『ご主人様は疲れているのか無口無言。

どこの武士のように眉間にしわをこさえながら、雄雄しい獣のお姿になつてくれた。

爺様たちが、周りでやいのやいの言つてゐるが、昨日までにみつちり受けた講義を思い返した。

怪我をさせないよつて丁寧に、不自然な体制を長く取らせないためにも手際よく。

まず、『ご主人様の背後に立つて、前足を抱えあげた。腰を押し付けて胸を張るように背中を支えると・・・あら不思議。

羊さんの直立スタイルの出来上がり。ここから今度はそつと尾てい骨をあらじて行けば・・・両手両足前に翻いの羊さんの出来上がり!

おし。こじまではうまくこつた。それではこれからが本番です。

「『ご』主人様、わたくし『ご』ときの拙い手で申し訳ありませんが……失礼いたします」

大きな鋏を手にとつて、そつと白銀の毛並みに沿つて鋏を入れた。

・・・一心不乱に鋏を使い、ふと気がつけば予定よりも時間がおじていた。

でも、ご主人様はじつとしてくれたままだ。ありがたいけど、それが却つて自分の未熟さを突きつけられたようで、申し訳なくなる。

最後の最後まで身じろぎひとつせず、じつとしてくれていたご主人様が、私が腕を止めたのを感じたのか、ひょいと起き上がった。

無言で青い瞳が私の瞳を覗き込んでいる。

その瞳がそつとそらされて、私はあせつた。

ザンバラの虎刈り姿になつてしまつて、わたしのあまりの下手さにご主人様が呆れたんだ！

そう思つたら、思わず涙がにじんだ。

あわてて手を伸ばし、『ご』主人様の体にしがみついた。

「・・・『ご』、『ご』主人様、『ご』めんなさい・・・！ 練習したし、みんなも上達したから大丈夫だつて言つてくれたからつて、『ご』主人様の毛を刈るなんて、私には早すぎました！ やつぱりまだまだでした」

そしたら、どこからか咥えて来たシーツに、頭を突つ込んでもぞも

ぞしていたご主人様が、「立ち上がった」

えぐえぐしながら見上げる先に、髪がてんでに短くなつた、ご主人様のお姿が・・・！

優しいお顔で微笑んでくれて、

「芽衣。来年もまた芽衣にお願いしますね。良いんですよ。だんだん慣れてくれればいいんです・・・」

そう言つて、女神様のように慈愛に溢れた微笑を見せてくれたので、私はまたも泣いてしまつた。

* * * * *

「ご主人様、来年はもつとちゃんと刈れる様に練習しますー。」

そう言つて泣き笑いをした彼女は、あいも変わらず、鈍くて可愛い。

真剣に仕事にまい進する彼女は、私のだらしない姿を見ても眉一筋も動かすことはなかつた。

・・・それどころか。

彼女の胸に抱かれて、彼女の全身の動きを肌で感じられて。

芽衣の真剣な横顔、纖細な指先が、私のわき腹をなぞり、全身ぐまなく撫でさすられて。・・・いや、毛を刈つてているのだから当たり

前なのだが。

ほつ、と切ないため息が口をつく。

ただでさえ、恍惚のときなの。

芽衣の指はそれ以上の快感をもたらした。

「・・・癖になってしまいますね・・・芽衣」

黒髪の、柔らかい娘を抱き寄せて、毛を刈るとついイベントの重大さをじつ伝えよづかと悩んだ。

これはそもそも、夫婦でないと成し得ないイベントなんですよ、と言つべきか。

将来を誓つたものにしか、その身を任すことはしないのですよ、
と言つべきか。

白銀のノルティは、思案する。

羊の国から、衣替え（後書き）

わざと、勃つてたとおもつ長様の一物。でも芽衣は一生懸命。

羊の国から狼になつ

腕の中でもどりむ娘。

「先祖様、もうこい加減この娘、食つてもいいですよね？」

毎度毎度毛皮に頬を染め、顔を埋めてばべつべべつと寝ぐ。

・・・・・「芽衣。顔を埋める場所が良すぎ……いや、悪すぎる。

理性で押さえ込むにも、それなり限界だ。

「」の滾る想いを形にして、君の柔肌で静めてもういたいのだが・・・。

「へり」

愛しい娘は夢の中。

拷問か、拷問なのか、これは。たまに股く・・・（じほん）で懐かれるのが困る。居心地のいい場所を探しているのだろうが、時折頭をぐりぐり・・・するのが困る。困るのだ。

「・・・・・」

頭の片隅で悪魔が囁いた。

【男の腕の中で毎晩寝ているんだ。その氣があるに違ひない、

悪魔め！

可愛い芽衣を毒牙にかけていいとでも…？

【食わなきや誰かに食われるが】

そんな不埒者ほどの里にいない！

【…どうかな？】

「んむー」

口の辺りと転がってきた君が、わたしの毛皮にすつすつと壊した。

・・・ふと微笑が浮かぶ。

愛しい芽衣。

いつかその瞳に、獣姿ではない私を映して、その頬をぱら色に染めて欲しい。

「んー、んんー？」

芽衣の眉がよつ、むくつと瞼を起したのはその時だった。

「・・・芽衣？」

珍しいな、起きたのか？

そう続けようとした頭は、次の瞬間白く染まつた。

・・・あまりの衝撃で。

「・・・」しゅじんしゃま、しれ、じゅまれす
ふわふわした眼差しで、寝ぼけているのが丸分かりの顔で芽衣が。

握り締めた。

「むー、しれじゅまれす、じゅまー」
硬くてじつじつして、しかもなんか熱くてえー、なんれこんな
棒切れベッドに入ってるンれすかあー。

・・・がしつと握り締めて、右に左に縦横無尽。

何か言つべきなのでしょうが、声を抑えるので精一杯です。それ
以前に軽いパニックに陥りました。

「あんみんのぼーがいれすー。めいは、だんじりしきしちゅう。
・・ぐう」

しまいに、握り締めたまま眠つてしまつた。

・・・冷や汗が、出た。

その手を外すのにどれほど理性を総動員したか。

今宵の私は、褒められていいと思つ。

そんな毎日が続けば、寝不足にもなる。

そして元凶が心配して看病に勤しみ、また寝不足になるのだ。

「…………」

最近のノルティさんは、敬老？ なにそれおいしいの？ といふ
でありますにたむろする、不良老年、排斥していいよね？？？ 系の
物騒な思考回路しか存在しない。むしろそれ以外許さない。

「『主人様！ 急に動いちゃダメですよ！』

「…………芽衣…………それは、なに？」

「H、爺様方がプレゼントしてくれた、看護師の制服です」

ピンクの超ミニナース。

甲斐甲斐しく『奉…………仕事中。

頭が痛い。

「『主人様、香り草を食べやすく煮てポタージュにしてみました
一。はい、あーん』

「…………」

にこにこ笑顔でスプーン差し出され、期待に満ちた慈愛の顔で見
られれば、白旗あげる他はない。

扉の向こうでうずうずしている爺どもを喜ばせる気はないのだが。
ないのだが！

そつと、口を開いた。

しかし、おせつかい爺ども。

「」で探してきたんだ、この衣装。

芽衣のなげなしの白乳が、よせてあげて、みごとな隆起を表して
いた（職人技だな）。

上乳がつやつやしているのが丸分かりだ。顔を埋めたらふにゅつ
として心地良いだろうな・・・。

長マリのスカートからは、太ももの艶やかな滑らかさが（触らず
とも分かる！）垣間見える。眼福だ。

腰の辺りは程よくくびれ、腰から尻への滑らかな隆起が・・・あ
あ、触りたい。

撫でて、揉んで、直に触れたい。

舐めて、噛んで、くすぐりたい。

「」主人様？

「・・・ああ、芽衣・・・これは、反則です」

理性を試すのは、もうこれぐらいで勘弁して欲しいのです。
やわらかいナース姿の娘の腕を、握り締め、体勢を入れ替えてベ
ッドに押し倒した。

「うわっ！」「」しゅじんさま？

「今日は、このまま、添い寝してもらいますよ。私が心配なのでしょうか。では、全快するまで一緒にいてもらわなくてはね朝も昼も、もちろん夜も。」

耳元で呴けば、娘がひやっと首をすくめた。・・・あ。耳が感じるとほくそ笑む。

それから、真っ赤に染まつたその頬に、くちびるをひとしながら、芽衣の唇に沿つて親指をすべらせた。

その刺激に顔を真っ赤に染め上げ、私の視界から逃れようとする娘。

芽衣に、よつやく男として見てもうえた歡喜に胸を震わせた。

・・・これからだ。
君を捕まえて離さない。

「私が良いと書つまで、一緒にいるんですよ。どうにも・・・誰の元にも行つてはいけません」

その言葉に、娘がじぱらしくして、うなずいた。

もういいなんて、絶対に私は言こませんけどね。

ああ、狼が獲物を見る氣分とは、こんな感じなのでしょうか。

確かにこの感覚は、癖になる、と語ります。

羊の国から狼になつて（後書き）

でも長様、狼ぶつても、羊ですからーーー。
握られて一コントロールステイックよろしく動かされてー。
泣いて良いかも。

羊の国から、狼になりたい

「・・・もう一つそ、獣姦でも良いか

どこか遠い眼差しで彼方を見ていた旧友、羊族の上位種、ノルディがポツリ呟いた。

「ふふーっ！…！」

「な・・・な、な・・・ノルディ！」

旧友と嗜んでいた飲み物を、山羊族の上位種ラグエルは一気にふきだし、叫んだ。

少し器官に入つたかもしれない。げほげほと咳き込みながら、ラグエルは少し前に聞いた言葉を反芻した。な・・・なに言つたこいつ。今なにを！

田を白黒させて見た先には、麗しの美貌の主、羊族の若き長がいる。

・・・明日の婚礼に参列する為、山を越え山羊族の地まで來ていたノルディは、山羊族の長ラグエルと、食後の軽い酒を楽しんでいた。

しきりに呟いているラグエルを流し田で見た後、ノルディはため息をついた。

「・・・うるさいな、ラグエル。らぶらぶの貴様には分からん苦悩だ。大体同族と婚姻を結べたのだから、私とはスタートラインさ

え違つ。むしろ貴様にとつて獣姫はノーマルプレイだらうが「白銀のノルディは優美な眉目にしわを寄せ、苦惱の色を見せている。苦惱する若き長は憂いを秘めて限りなく美しかつた。

・・・が、紡がれる言葉は凶器。

「お・・・落ち着け、ノルディ。あの小猿は、そもそも人族だろうが！ じゅつ・・・獸つ！？ ダ、ダダ、ダメだらうが、貴様！ 泣かれて嫌われるぞ！」

そもそも落人はデリケートな生き物なんだから！

出産の折は、精神面のサポートが色々大変だつたと、各国の長が言つてたぞ！

・・・その話を聞いて、お荷物（落人）が落っこちてこなくて良かったと思ったことは内緒だ。

焦つたラグエルに、ノルディは冷めた眼差しをよこした。じつと見つめて、しばしの後、ため息をついた。しみじみと。

「・・・芽衣は、羊ラブなんだよ、ラグ」

明けても暮れても羊・羊・ひつじ・だ！ 子羊、娘羊、の次くらいに私なんだよ。それでも人型だつたら爺の後に回されるんだ・・・。

グルーミングの順番に物申す！ とばかりに、拳を握り締めてプルプルしたノルディだつた。

そんな常になく煮詰まつた感じのノルディに、ラグエルは恐る恐る腕を伸ばした。

「お、おい。酔つたのか？ 酔つてゐるよな。酔つてゐると言つてく

れ

「酔つてなどいない」

不穏な空氣をかもし出す、白銀のノルティにラグエルはたじたじだ。しかもそのノルティは、ラグエルの戸惑いに気づいてはいても、自分の苛立ちを発散させるので手一杯だ。

・・・まあ、こつもは長として監を率いなければならぬに重責にある一人だ。

旧友で悪友のラグエルの前、さらに酒が入ったからこそ、零れ落ちた本音だろうが、いかんせん。

内容が痛かつた・・・。

「・・・そうぞ、いつそ人型より、羊形態の方がよろこんで身を任してくれるかもしれないな・・・」

・・・当のノルティ、酔つてはいないが、もちろん、自棄だ。

「・・・ふふ。ふふふ・・・（遠い目）。毛皮に魅せられているうちにのしかかれれば良かつたんだ・・・」

芽衣のピーに滾るピーを突っ込んで、あんあん言わせりや済んだんじやないか？

今じやすつかり安心しきつて、同じベッドで寝る始末。どーすりやいいんですか、この滾る思いの行く末は！

ああ・・・。

「狼になりたい・・・」

がつくし

「お、おおおお落ち着け！ お前、俺を祝いに来たんじゃないのか！ それとも愚痴を言いに来たのか？」

花婿は、独身最後の夜を旧友との昔話に費やすつもりだったのに、なぜか、一本切れた風情の友人を、いなすために汗をかいていた。

オカシイ。

なんか、立場が違う。

やつかみを受けながら、酒を酌み交わし、恋人の惚氣をきかせて羨ましがられるはずなのに、なんだこの仕打ち……！

「……幸せそうに鼻の下を伸ばしているから、いやみのひとつも言いたくなるんですよ。ええ、腹の立つ……リエル女史に嫌われろ！」

リエル女史の目が覚めることを、切に祈りますよ、私は！

「ノルディ！」

「……ああ……そう言えば、芽衣に頼まれてましたね……。まずはそのうつとうしい髪、そり落とすか……」

青い瞳が底光を見せる。……うつそりとノルディが立ち上がった。

無駄に威圧感が漂う。

ラグエルさんたらたじたじだ。

「……つるつるにしてやつますよ。……私が芽衣につるつるにされたくらいにね……」

「おまつー 何の恨みがつー！」

「・・・おとなしくなさい」

ソファに腰掛けているラグエルに、压し掛かつて押さえつけたノルディが、妖しく笑つた。

・・・そのときだつ！

どかあんんんつ！ だだだだだつつー がこがこがたがたつ！

ものすゞい音が響いた。

一瞬の沈黙の後、

「あた、いたた・・・

「あらやだ、めえちゃん。だいじょ「つぶ？」

「や、やあん、私としたことが・・・！」

ピンクの髪の娘と黒い髪の娘が、踏み倒した扉の前でじたばなしていた。

「・・・メリー？ 莺衣？」

「・・・なにをしてるんですか？ ノルディが呟いた。

わたわたと立ち上がり、スカートをぱむぱむした娘達がとびつき

りの笑顔をふりまいた。内心はどうあれ、とびきりだ。

「『』、『』、『』主人様！ え、と・・・」

「あの、明日の打ち合わせをしておりまして、その・・・」

「し・・・失礼いたしましたあつ！」

慌ててドもる芽衣を尻目に、メリーサンが慌てて部屋から走り去つた。それはもう見事な逃げっぴりだ。

後に残された芽衣も、娘さんが走り去つた扉と、ノルディたちを見て、おろおろすると、がばっと頭を下げた。

「あの、そ、その・・・ビーナ、『じゅつくつ』『じゅつくつ』！」

ドップラー効果で声が彼方に消えていった。

「・・・？」

「・・・なんだ・・・？」

後に残されたのは、ソファの上で首をひねる羊族の長様と、山羊族の長様の二人だった。

だが、客観的に見て。

ソファに身を投げ出したラグエルさんに压し掛かり、ラグエルの万歳両手を片手で拘束し、あまつさえ彼の体を膝の間できつちりと抑えていたノルディのさんのお姿は。

腐女子的には、脳髄直撃の「美形鬼畜言葉責め男子」だった。（

いやまだ責めてない。）

「あいつら、いつたいなにしに来たんだ……？」

「……いや、明日の花嫁の、付き添い担当なんだが……」

ソファで呆然と呟いたラグエルに手を貸して、ノルティはそのままラグエルを引き起こした。

なんだか、考え込んでるだけ損な気がした。芽衣は相変わらず芽衣だし。

「……なんだ……まあ……手がかかりそうだな……小猿なだけに」

「小猿ではない。芽衣だ。だが名を呼ぶのは許さん。……ふん、貴様よりは望みがあると思つていたんだがな……。なんたつて、リエル女史だ。さて、どうやって落とした。泣き落としか」

「……ん。まあな……泣き落としだ」

我に帰つたノルティさんとラグエルさんの恋話はその夜遅くまで続いた。

婚礼は厳粛な中に華やかさを含ませた、新しい風を感じさせるものになるだろう。

色とりどりの花に、飾り付けられたお屋敷の広間に、招待された

ものたちのため息が聞こえる。

山の中では身内だけの素朴な婚礼が主流だったようだから、これは大きな変化だらうと芽衣は思う。

婚礼の部屋に入ると目に飛び込む、細長い真っ赤な織物が鮮やかだ。

赤い絨毯の先に、山羊族の祭壇を飾りつけてもらつた。初めての試みでみんな戸惑つていていたけど、イラストを描いて見せたら納得してくれた。後は簡単だ。絨毯をはさんで、両脇にいすを並べて、親族の席を作り、絨毯側には花束とリボンを飾つた。

本当は祭壇の上に、大きな十字架がかけられるはずなんだけど、そこには山の神様のモニュメント。

大きな羊さんのタペストリーを飾つた。そのすぐ下に宣誓台。両隣に燭台。

向こうの世界の結婚式の様相を話したら、それでは、私の仕事は重大ですね。とノルディ様が笑つてくれた。だから、出来ると確信した。

精一杯祝福しましそうね。リエル女史は祝福されて当たり前の考え方なんだから。とノルディ様はにつこり微笑んでうなずいた。

・・・ノルディ様は今回、祭壇の前に立つ、羊族山羊族すべてを代表して祝福を授ける、重要な役割だ。ラグエルさんの頼みにノルディ様は二つ返事で了承した。それからはこの日の前後を空けるため、仕事を寝る間を惜しんで片付けた。

「これが、バージンロードって叫うんです」

祭壇の前で、ラグエルさんは立つて待つんですよ。

そこでこっちの扉から花嫁がお父さんに手を引かれて入場するんです。

でも花嫁さんは親御さんがないから、マリーさんと私が付き添いになるんだ。

「ここを一步一步歩いて、花嫁は花婿のもとに歩いていくんです

絨毯はこの日のために芽衣たち羊族の少女が織った絨毯だ。処女の娘が織った繊細な織りは、お金だけでは手に入らない。でも誰もが織りに混ざつてあつという間に織りあがつた。

「リエル姉様を最高の花嫁にして見せます！」

羊族の娘達は憧れの山羊族の女傑に、捧げる貢物、ということで盛り上がっていた。

山羊族の若き長が、花嫁となる娘を連れて羊族の長の元を訪ねたのは、かれこれ一年も前のことだ。図案化したタペストリーを作つて欲しいと頼まれた。羊族、山羊族の昔からのしきたり。

嫁ぐ娘の幸せを祈つて一年も前から準備するのだ。

糸を染め、紡いでは、図案を悩み、一織り一織り心をこめる。好きな花、好きな鳥、好きな色、花嫁に似合つ色、柄、組み合わせてそれは出来る。

世界でたつた一つの織物。

花婿から贈られるそれ。

・・・山羊族屈指の女丈夫リエルは、ラグエルが長となるまで、山羊族を率いてきた女首領だそうだ。

まだ頼りないラグエルが、長として立てるより陰になり日向になり支えてきた赤い髪の乙女。

無数の傷を衣に隠し、領地の民を守りぬいた武勇の人。里を守ることに必死で、気がついたら婚期を逃していたラグエルさんより九歳も年上の上位種のお姉さん。

始めて会った時は右額に刻まれた大きな傷が痛々しくて、驚いた。けれど、その傷を愛しげに撫でながら、リエルさんは笑ったのだ。ラグエルさんと目線をあわせ、困ったように、でもほのぼのと笑つたのだ・・・。

「・・・体中傷だらけで、顔にも大きな傷が残つてて。別の娘を選べと散々言つたのに、こいつときたらちつとも人の話を聴かないんだ」

と、リエルさんが困つたように笑つた。

その傷がいいんだ、とラグエルさんは言い切つた。

「この傷を誰より愛しているんだ。柔らかい白い手の女より、リエルの硬い手のほうが、優しい言葉より、リエルの容赦ない声の方が万倍も好きだ」

まっすぐ見つめて言い切つた若い長の姿を見て、誰もが見ほれる花嫁を演出しようと思つた。

風当たりは強かつたそうだ。

若い長をたぶらかした女狐と呼ばれたこともあつたらしい。女の

人を侮辱するなんて許さない。

鼻を明かしてやううよ、といったら、リエル姉様、氣後れしがちで困つたんだ。

「……」ひひひしててちつとも女らしくないだう？ 腕だつて足だつて、顔つきだつて凜々しいと言われることはあつても、綺麗だと言われたことは無いんだよ。……大体この体格では、入るドレスなんか無いだう？」

レースやフリルみたいな、女の子然としたカツコウなんか、もう随分と取つてないんだ。

似合ひはず無いからね。

そう言つてあきらめたように笑う姉様を見て、私とメリーさんは奮い立つた。

「マイナス数えてても良い事ないんですよ！ 良いことをうんと伸ばしましょ！」

やうやく、見せ方一つで女は変わるんだ。

「姉様は」ひひひしてて言ひなど、無駄な贅肉が無いつてことです！ それってスレンダーって言つんですよ！ 立つて見て下さい。ほら、とっても姿勢が良いでしょ？ 立ち姿が美しいんです。スレンダーで出るとこ出てる姉様には、」ひひひしてたドレスより、シンプルなラインのドレスが似合います！」

そういうた私に、メリーさんも同意した。

「まかせて！ とびきりの綺麗な花嫁さんにしてあげる

でも、本当は着飾らなくてもリエルさんはきりきりしてて、綺麗だ。

「……いまだに反対する馬鹿な親族が多くて、困るんだ」

ラグエルさんの咳きも後を押した。じびきりの花嫁を、見せてやるんだ、そのつむぎ型の山羊たちに！

「熊は熊らしく、ビーンと構えてなさい！」
バシッと背中をたたいたら、ラグエルさんがようめいた。

「つなつ！ 誰が熊だ、誰が！」

「つなつわね！ むさこその髪そりなさいよ！ 花嫁の隣が熊男じゃ、ますます美女と野獸だわ！」

「い・・・この猿！ 貴様の腕は確かにと皆が言つから、任せるんだからなー、そこ間違えるなよー！」

「分かつてんわ！ まーかせなさいー！」

どんと胸をたたいて、咽たのは秘密だ。

何より、熊は敵だが、リエル姉様には味方したいんだからー！

羊の国は織物の国。

取つて置きの子羊ちゃんの毛を紡いで、つやのある、薄い薄い反物を織つた。皿をつめてテロンとした手触りのしなやかな織物。これで体の線を出すマーメイドドレスを作る。

初めてのドレスはメリーアンも興味しんしんだった。

「それを広がらせるのね？」

「そうそう。こつ、ドレス 자체がお花のよひに」

「これぐらいかな・・・もつと？」

羊族の娘さんたちも、真剣そのものだ。みんな必死で針を動かした。

リエル姉様は鍛えていた武道派だつただけ、鍛え上げられた体がすばらしい。筋肉質を隠すより、薄い生地でまねの出来ない肉体美を前面に押し出せば、うつとりするだろうと思つたんだ。

案の定、シンプルな飾りのないドレスに身を包んだ姉様は、掛け値なしに美しかつた。

白いドレスに真つ赤な髪と瞳が映える。

リエル姉様が気にしていた傷跡もシフォンのケープや、手袋で隠せるよ、と言つたんだけど、ラグエルさんの一声で、リエル姉様はあえて傷を隠さず、額の傷だつて前髪を上げて私達に見せたんだ。

「守り抜いた証だ」とラグエルさんは言つた。

「守つてくれた証だから、隠す必要はないんだ」と。

ああ・・・ラグエルさん熊の癖に分かってるなあ。でも、本人に確認してからじやないと、ダメだよ?と言つたら、すぐ姉様に尋ねていた。

リエル、あなたはどう思う?俺はその傷は勲章だと思うんだ。でもあなたがいやならば・・・と、おろおろしながらラグエルさんがリエル姉様の顔を覗き込んでいた。

リエル姉様が泣きながらラグエルさんの首に腕を回すのを見て、みんな、わっと盛り上がった。

リエル姉様は、ラグエルさんのために傷を隠そうと思っていたんだ。親族の男に、傷もちの娘より、うちの娘を娶ればいいものを、と言われ続けて、下を向いていたらしい。やつと吹つけられたようで、顔を上げたりエル姉様は、それまで以上に美しかった。

それから、最後まで抵抗していた彼の髪だけだ。

「主人様が綺麗にそりあげてくれた。さすが……！」

そして、婚礼当日。

白の山羊族特有の衣装を着たラグエルさんが待つ祭壇に歩み寄る、リエル姉様の美しさは、後々の語り草になるほどだった。

神聖で厳かな空気を盛り上げていたのが、壇上で祝福の言葉を述べる羊族の長さまだつたのは、言わずもか。

打ち合わせたとおりに式が進む。

「主人様が厳かに

『誓いのキスを』

と、言った。

・・・羨ましいなあ、と思ったのは、内緒だ。

・・・ちなみに、その後羊の国に戻つてから発刊された、小冊子の内容も内緒なのだ。

羊の国から、狼になりたい（後書き）

えー・・・そのもののすばりの構図だと思います。

羊の国から、なつやすみ。

拝啓。

異世界にいらっしゃるお父様、お母様、いかがお過いりですか？

じゅうじゅうとても平和です。

涼しかったあの時期はあつとひつ間に過ぎ去りました。寒かつたあのころが懐かしく感じられます。

今はむかへ、暑くてあつくて溶けかけないかと毎ひらくことです。現に木陰で、でるへんと伸びている子ひつじさん続出なんですよ。・・・それはそれでかわゆいんですがね。あのテロソとしたところなんか見ていると、鼻息が荒くなつて、目がまばたきになつてしまいしますね。にやにや。くつたりした子ひつじさんを枕に、昼寝。いいですねー。暑いので嫌がられてペしペしされますがね。

・・・ そんで毎度主人様に怒られますかね・・・。

熱中症が怖い今日この頃なので、子羊たちには水分小まめに取るよう指導しています。

かつかと燃える太陽さんが恨めしいです。

でも芽衣はせつせと涼しい夏を演出しますよー。 愚痴を言つてこ

ても仕方がないもん、楽しまなきゃ 捨です。

水辺に大きな布を張つて、簡易テントを何個も作りました。日陰を作つて居心地よくすれば子羊ちゃんたちも喜ぶだろつと思つて！

瑞々しい果物も沢山冷やして、香草の青汁だつて準備しました。さらにおこちやまには甘い飲み物。大人の皆様にはすつきりした果物ジュースに、キンキンに冷やしたお酒です。サンドイッチも各種。つまみやすいようにピンチョスにしました。羊さんのチーズで作ったピザだつて、夏ばて防止にお野菜のピクルスだつて準備しました。

そしてご主人様にお願いして作つてもらつたのが、川の支流をせき止めた簡易プールです！

でも完全に流れを止めたわけじゃないんでニニ自然に流れるプールです！

小さきものが流されないように入手だつて募りました！ 下流でしつかりと成人牡羊の皆さんが見張ります。でもこんなに成人の牡羊さんがいたつてことが驚きです。

聞けば、お屋敷とは別の屋敷で、田々毛織物の運搬や販売などの商取引を行つてゐるそうです。

「あのね、あのねー、でいりきんしになつたんだよー」

「おさまがねー」

「きめたのー」

「じじさまもいっしょになつてねー」

「「「きんしだーつて」」」

「「「でいりきんしだー？」」」

「・・・えーと・・・」

答える前に、血相変えたご主人様に搔つ攫われました。後ろで小さき者たちがメリーサンに説教受けて、さらに小さくなつてました。かわいすぎる・・・。

・・・さて、万が一のために川を横切るよつに丈夫なロープを五本張りました。

ちいさきものたちが手をすり抜けてもどれかに引っかかるでしょう。むしろ引っかかるために大人の手をさけるでしょう。

準備はおーけーです。川流ればつかー！

川原にこだまする子供達の歓声。楽しそうな笑い声。

万全の川遊び。でも喜んだのは小さき者だけではありませんでした。

「おお、嫁御、嫁御、お茶がなくなりそうじゃー」

「いっちに来て一緒に水浴びするかー？」

川にはまつてじたばたしてゐ（・・・としか見えない）爺婆に手招きされました。

「水着はこの間渡した奴じやろうなー」

「おー。おさとま好みのー」

自分の体の前で手でカーブを描く爺たち。・・・その手つき何。

「ぐふふ。あれを着た嫁御を見れば、朴念仁の長様といえどー！」

「辛抱堪らん！」

爺たちが腰を前後にかくかくさせながら、叫んだ。

ほんと、無駄に元気な爺ちゃんたちだ・・・。

「・・・ところで、皆の衆へ、力キ氷にはイチゴミルクじゃと、わしはおもうのじゃがー」

「いやいや、香草ミルクがいちばんじゃー」

「おおお、特に嫁御特製の香草を使った香草シロップは絶品じゃの~」

「さり気なさを装つて話をえた爺たちの目線の先で、ご主人様が無言の威圧感を出していました。・・・ご主人様、凍ります・・・。

・・・でもまあ、良いか。夏だし。

今日は一日一日で、羊族総出で遊ぶのです！

だから遙かなる異世界にいらっしゃるお父様、お母様、

大丈夫。芽衣は、元気です。

* * * * *

水しぶきがあがるたび、小さきものの歓声と、芽衣の笑う声が聞こえる。

羊族の上位種ノルディは、水着をつけた芽衣の姿に釘付けだった。掴んだタオルもそのままに、呆然と見つめるその先で。

・・・芽衣の小ぶりの形良い乳が濡れていた。

ぴたりと張り付いた布が、芽衣の綺麗な形を浮かび上がらせていく

る。・・・それは先端の甘いつぼみも。

小さな尻が申し訳程度の布に隠されて、でも腿の間の柔らかい部分がふつくらと盛り上がっているのを見て、大判のタオルを手に駆け出そうとしたノルティさんだったが、楽しそうな笑顔に声をかけるタイミングを逃してしまった。

体のラインはまったく言つていいほど隠されていないが、全裸よりはマシ。男の劣情かき立てるが、全裸よりはマシ。

・・・だが、この姿を見ているのが自分ひとりじゃ無いことが、こんなにも悔しくて、常なら隔離されているはずの牡羊達の目玉を潰して回りたい、とぐるぐる唸るノルティさんだった。

だいたい。

川遊びなら私や既婚者だけでも良いだろ? いつの間にか組み込まれていた成人牡羊の群れ。メリーやリリアナの懇願に押されたが、呼ぶのならなぜ恥らつて隠れているのだ、さつさと目当ての男を釘付けにしておかないか!

私の芽衣が万が一にも目を奪われでもしたら、どうするのだ!

芽衣の柔らかな黒髪が濡れた肌に張り付いて、稜線を美しく演出している。すらり伸びた太腿の艶やかさに、目の前がちかちかした。さわり心地の良さそうな胸から腰、腰から太腿と目をやつて、際どいところに刻み付けた赤い花を認めて安心する。

タベ、きつく吸い上げておいてよかつた。

胸元と右わき腹と太腿の内側。

特に両胸のあわせの内側、見えるか見えないかと言いつづきりのところ。普通なら見えないそこは、上から胸の谷間を覗かなければ見えない場所だ。現に成人した独身男子が覗き込んで跡をみつけ、私を見て青くなっていた。

その目線にふと余裕の笑みを帰す。／＼実質余裕なんか無いに等しいがな！ そこは男の意地と言つものだ。

「あやつー やつたなあー！」

小さきものが芽衣に向かつて水をかけたよつだ。ばしゃばしゃと水音、楽しそうな声が響いた。

芽衣も笑いながら応戦している。大きく開いた足の間の水を手のひらで掬つては投げかけていた。

・・・その右太腿の際どいといふこと、赤く咲いた花。

芽衣を田で追つていた男の顔が、さつと色をなくした。

・・・それでいい。

あの娘は、私のものだ。

「・・・百物語？」

白銀の麗しの長様が小首をかしげた。

「はい！怖い話を順番に話していくんです。」¹にいる人数分なので厳密には百物語にならないんですがね。話しあつたら持つてるわらうそくの火を吹き消すんです」

ふーってね！

「……なるほど。徐々に明かりが減つて恐れしさも増すと言つてですね……」

「はい！意中の人隣にすわると良いですよ！怖がつてぎゅうぎゅう抱きついてくれますからね！」

「……では、私は芽衣の隣に座らつ

「は？」

何か言い返す前に、『主人様の隣に座らされました。……え、でもここを狙つてる人は沢山いるんですよ？お尻がうずうずと居たたまれなさにつづきます。良いのかな、ここにいて。

恐る恐る顔を上げると、となりに座る『主人様が満足そうに笑つた。

「……ほつとした気分になつた。

「では、皆準備はいいか？……はじめるぞ」

厳かに『主人様の声が響いて、各々のわらうそくの火が灯された。

「・・・後ろを振り向いた時・・・そこには血まみれの羊の姿が・

・・

「ひイ！」「ひょえ！」「ひやあ！」

小さきものを筆頭に、羊族の俊英たちが情けない声を上げた。牡羊の名誉のためにいうが、何かを決意した娘羊に抱きつかれて驚いたのだろう。現にメリーの隣の男は、顔を真っ赤にしてわたわしている。

リリアナの隣の男は奇妙なまでに固まっていた。

「かたかたかたとなる音に慌てて顔を上げたら、窓の外に無数の人形の首が・・・！」

「ひう！」「ひいい！」「ひょわあ！」

小さきものにいたつては、頭かくして尻隠さず。積み上げたクッシュョンの山に頭を突つ込んでプルプルしている。尻が震えているのを見ても、なんの感慨も浮かばないが、芽衣が見れば、きっといつものように鼻息荒く子羊の尻を追いかけるのだろう（いやな表現だな）。だが、芽衣は今はそれどころではないようだ。

・・・ふ。

「水のそこから、今も聞こえるそうです。・・・おいでえ・・・おいでえ・・・と

「はう！」

・・・ふふ。

「走つても走つても耳元で叫ぶんだってえ、かえせえええってー。」

「ひ、うー。」

がたがたと震えながら私の腕に縋りつき、私を盾に隠れているつもりなのだろう、芽衣の姿を目にすれば、どんな媚態も敵わない。かくかくかくと震え慄く君の姿はなんとか、・・・かわいらしいにも程がある。

せら、今また吹き消されたかの炎に、いつひつひと動く、黒い瞳。

おやかと思つが、お化けとやうを探してこゐる?

君の一番近いところに私がいて、そんな居るか居ないか判らない代物を傍に寄せ付けると思つてゐる? ありえないだろ?

だから意地悪したくなるんだ。

「・・・・芽衣。ほり詰詰し終つたよ、キリの番だ」

「・・・ひい。・・・わ、わたし、です、か・・・?」

ふふふ。腰が抜けそうな頼りない顔で見上げてきた芽衣の可愛らしさは、筆舌に尽くしがたい。

「のまま芽衣を抱き上げて部屋にこもり、朝まで鳴かせたくなる

モビール。

芽衣の柔らかいところを暴いて、噛り付いて、啜り上げて、全部味わってえぐり立てて、一番奥で果てたい。

肌の上にシルシをつけるだけじゃ、足りないんだ。

芽衣の中に刻み付けたい。

深く繋がって、離れられないほど近くにいたい。一ガサナイ。

「あ、じゃ、わ、わが、最後によ、おはなし、です」

ひしひとわたしの腕にしがみ付いたまま、芽衣が話し始めた。

「・・・で、慌てた少年が村に帰つてみんなに言つました。

狼が来たぞーっ！つて・・・。でも、さんざん嘘をついていた少年の言葉を誰も信じてくれなくて。

やがてやつて来た狼の群れに、村人達はみんな食べられてしまつたという事です・・・。

おしまい！」

わたしは、ふーっとおつそくの火を吹き消した。

みんなの怖い話が本当に怖すぎて、これ以上は泣いてしまって
だつたから、御伽噺で場をこじらかうと思つた。

「あれ？」

話しあがつたのに、みんな微動だにしない。

「……」じょじょさま……？ みんな……？ 「

顔を上げてノルディ様を見た。それから、みんなも。

「……え」

……みんな、白目を剥いて氣絶していた。

羊の國かい、なつやすむ。（後嵯峨）

美形の白田・・・（遠い田）

がくぶるしながら躊躇されたのでしょ。」

「おおかみ・・・」

「おおかみがきた・・・」

「おおかみが・・・」

「ひわあああああああんんんん、むひひそつかないいいいい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7278o/>

羊の世界にとりっぷ！

2011年8月11日20時51分発行